

新潟大学人文学部芸能論平成12・13、15年度調査報告 — 柏崎市女谷の綾子舞 (2) —

芸能論ゼミ

第五章 綾子舞の調査・考察—囃子舞の場合—

第一節 囃子舞考察の方法

囃子舞に関しては、狂言本に残された同曲と推察される曲と、次のような比較を中心とした考察と調査を行った。曲目は次の通りである。

三番叟、松の舞・菊の舞・鶉舞、蟹舞・大黒舞・指取舞・たんづる舞

- イ. 大蔵虎明本『万集類』(池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇下』)
- ロ. 『小舞』〔享保7年以前〕(『日本古典全集 歌謡集 中』)
- ハ. 糸魚川市根知山寺の三番叟
- ニ. 『狂言集』(日本古典全書)
- ホ. 現行のもの a 下野
b 高原田

検討事項

- ①イ・ロ・ニとホ(a・b)との比較
- ②ハとホ(a・b)間の比較
- ③aとbの比較

考察事項

- ①現詞章の注釈を行う
- ②古詞章と綾子舞の囃子舞との関係
- ③高原田と下野の囃子舞との関係
- ④伝承経路など全般的考察
- ⑤囃子舞とはなにか

第二節 囃子舞について

綾子舞には踊と囃子舞と狂言がある。踊は少女が、狂言と囃子舞は青年の男子によって演じられている。囃子舞の場合は、男性一人がユーモラスな歌と囃子にあわせて舞を演じている。決まった振りを繰り返し行うものと、囃子歌の文句に合うような物まねをするものの二種類に大きく分けられる。「〇〇舞を見さいな」とリズムカルにそして面白い口調で唱えながら、物まねの手振りもよろしく舞う舞である。

＜囃子舞の曲目の整理＞

囃子舞には下野・高原田両部落を通じて、恵比寿舞・大黒舞・指鳥舞・うれしき舞・亀の舞・出来たり舞・肴さし舞・たんづる（台尻）舞・打ったり舞・狸々舞・杓子舞・笛の舞・鏡とき舞・さんぎ舞・松の舞・菊の舞・蟹舞・聖舞・兎舞・鶉舞・立たり舞・てんぼう舞の計22曲が伝承されていたという。

綾子舞の現行曲目については、戦後断続的な調査が行われている。それらの調査結果をもとに、現行曲目の変化についてまとめると、以下の表になる。

(◎…両部落共通曲、○…下野のみの曲、●…高原田のみの曲)

	昭和30年	昭和33年	昭和46年	平成8年頃
恵比寿舞	○	◎	○	◎ ※下野のみ
大黒舞	○	●	○	
指鳥舞	◎	◎	◎	◎
うれしき舞		●	●	
亀の舞	◎	◎	◎	○※
出来たり舞		●		
肴さし舞	◎	◎	◎	◎
たんづる舞	●	●	●	
打ったり舞	○	●	○	◎
狸々舞	●	●	●	●※
杓子舞				
笛の舞				
鏡とき舞				
さんぎ舞				
松の舞				
菊の舞				
蟹舞		●		●※
聖舞				
兎舞				
鶉舞		●		
立たり舞				
てんぼう舞				
三番叟	◎	◎	◎	○※

(※は平成8年の段階で上演可能の現行曲目である)

*昭和30年…近藤忠造氏「綾子舞研究」のうち、本田安次氏の調査による。

昭和33年…同論文のうち、近藤氏自身の調査による。

昭和46年…綾子舞後援会・同保存会『綾子舞への案内』より。

平成8年…「平成8年綾子舞パンフレット」より。

表によると、昭和30年から平成8年まで、両地域共通の曲目として伝承され続けている曲目は「指鳥舞」「肴さし舞」、高原田のみで現在まで伝承されている曲目は「猩々舞」ということがわかる。また、「亀の舞」「三番叟」は両地域共通曲として伝承されてきたが、平成8年頃には下野のみの曲目に変化したようである。その他の曲目については、伝承される地域が変化したり、途中で断絶してしまったものもある。

また、全く現行曲目として扱われていないものも10曲あり、これらの曲目は早くに伝承されなくなったのではないかと推測される。

<綾子舞と狂言諸本の共通曲について>

綾子舞の囃子舞は、狂言と一緒に伝承されたといわれている。

狂言や囃子舞の曲目のうちの数曲は、室町時代から江戸時代にかけての文献によって、京都近郊で行われていたことが知られている。民俗芸能学会平成15年度大会「綾子舞伝承500年祭—阿国歌舞伎から400年—」において、シンポジウムのパネラーを務められた林和利氏の報告に基づいて、綾子舞の囃子舞曲目と狂言諸本の共通曲について整理すると、以下ようになる。

『天正狂言本』…「大黒舞」「指鳥舞」「だんじり舞」「松の舞」「菊の舞」「蟹舞」「鶉舞」
(天正6年(1578)の奥書を持つ最古の狂言台本)

『大蔵虎明本』…「打ったり舞」「松の舞」「菊の舞」「鶉舞」
(寛永19年(1642)に書写された大蔵流最古の本)

『保教本』…「松の舞」「鶉舞」
(享保1～19年(1716～24)頃に鷺伝右衛門保教が書写した鷺流の狂言台本)

『改訂小舞謡』(昭和24)…「松の舞」「菊の舞」「鶉舞」

<囃子舞の起源について>

前述したように、囃子舞は狂言と一緒に伝承されたものであり、江戸期にやってきた夫婦によって伝えられたという伝説がある。また、猿若芸の系統をくむものであるといわれていた。しかし、近年では綾子舞の囃子舞は、猿若芸ではなく、中世の狂言に強く影響を受けたもの、狂言成立前後に囃子舞が行われていたのではないかと思われ、狂言の小舞から発生したものではないかと考えられている。林氏によると、前述した囃子舞と狂言諸本の共通曲より、囃子舞は室町時代の狂言の小舞から発生したものであり、中央で伝えられている各流儀よりも、より古い型を伝えているものではないかということである。また、綾子舞の中でも囃子舞に限定すると、内容は中央で演じられていた小舞と考えるならば、

狂言諸本から曲目が失われていくペースより計算して、囃子舞の伝承時期は1500年頃ではないかと考えられる。

(大山 望)

第三節 囃子舞の調査・考察

第1項 松の舞

1. 松の舞の詞章について

ここでは、

本田安次『日本の民俗芸能Ⅳ 語り物・風流』（以下略して「風流」）より：㉒

万集類の註（綾子舞囃子舞「まつのみ」）：㉓

万集類の註（保教本「松ノ舞」）：㉔

万集類：㉕

とする。

また、①～③に分けた。

①の部分

㉒・㉓「千年さかいし若緑」／㉕「千年のわかみどり」／㉔：なし

㉒・㉓「ごこんの色さきだて」※1／㉕「古今のいろをみずして」／㉔：なし

㉒「松こそめでたかりける」／㉓「松こそめでたいかいらきり」／㉔「治ル御代ニ住吉ノ松コソ目出度カリケレ 神宮皇后ノ弓矢ノ家ヲ守ラント納シ法ノ宮崎ノ松コソ目出度カリケレ」／㉕「松こそめでたかりけれ」

②の部分

㉒・㉓「まづ正月門松 たれにをとらん飾った 門々の松より たちやが松がすぐれたつかさくらいや高砂の 岸の姫松 いくよりかはらのいろみそろはば松の色にて」までほぼ同じ（濁点のあるなし、漢字の読み方は略す）／㉔「爵位ハ高砂ノ尾上ノ松ゾ見事ナ扱越路ノ安宅ノ松モ候」／㉕「あづまのをくにきこえたる、安宅の松の事やらん」

（㉒・㉓・㉔には「高砂」のことがあり、㉔・㉕には「安宅」のことがある）

㉒「そむいた」／㉓「そむな」

③の部分

㉒・㉓・㉕「志賀唐崎の一つ松」／㉔「唐崎ノーツ松」

㉒・㉓「まつにふたつはなけれども」／㉔「是モ妙成ル名木」／㉕「是もたへせぬ名木」

㉒・㉓「松はかどのともして 松の緑を手にもち」が同じ

㉒「ゆい千年ともながむる」／㉓「齡千年ともなかむる」

㉒・㉓「かざり松の下より」／㉔「重宝アリト飾テ齒朶樑ノ陰ヨリモ」

㉔・㉕「何よりも目出タキハ」が同じ

㉔「花ノ都ノ初メトテ正月ノ門松」／㉕「正月のかとまつ、たてならべたるおもしろ」

㉔「立続タル門並町ヲ下り通レバ此方ノ松ゾ目出タキ」／㉕「町をくだりさがれは」

- ①・③「十七八の御上臈が」／④・⑤「十七八ノ姫小松」
 ①・③「きり下げ髪にかどたて」／④・⑤「ユリカケ髪ノ門立」
 ①・③「おもしろをもて、そつと（そと）よつてつねつた」／④「此髪ヲ此髪ヲ櫛松ニ
 テモケヅラバヤ堪カタシト思ヒテ ソットヨツテツメレバ」
 ①・③「やらしまないとおっしゃり」／④・⑤「しほなやといふままに」
 ①「くげたをとりのけ」／③「紵台をとりのけ」／④「胡鬼板ヲ取ナライテ」／⑤「胡鬼
 板をとりをなし」
 ①「こびん長どあたりはりまつ こびん長どはられて」／③「小鬢長どはられて」／④
 「ココラヲテウドハリ松」／⑤「かしらをちやうどはりまつ」
 ①「あらいたや、あらいたやと、おつけてもにげたり」／③「あらいたや あらいた
 やとをかゑふいてもこけたり」／④「カイフイテニグレバ」／⑤「ひつふいてにぐれは」
 ①・④・⑤「あとよりやがておい松」／③「あとよりやがとをいまつ」
 ①「おもいまいりや、立ち帰りやんと、腰を一寸しめてそ」／③「思松や立帰やんと腰
 をちょっとしめてそ」／④「叶ト思ヒテ松根ニヨツテ腰ヲ抱バ千年ノ緑手ヲシメ」／⑤
 「立帰、松根によつてこしをだき手を、」
 ①「ひめこの松こそめでたかりける」／③「しめこまつ（縮小松）こそめでたかりけ
 る」／④「此松ゾ目出度」「彼ヨリモ万々年モ榮行御家ノ松ゾ目出度」／⑤「しめこの松
 ぞめでたき」
 ①「松の舞これまで」／③「まつのまいに」／④「松ノ舞ハ是計」／⑤：なし

※1：③は「ゑろ」となっているが、なまりか。他にも、「ひめこまつ」「しめこまつ」な
 どの違いはなまりから来ていると思われる。

2. 詞章の語句説明（50音順）

追松…あとから「追う」のと、「老松」（長寿の象徴とされる）の「おい」をかけたと思わ
 れる。

切り下げ髪…女の髪の結い方の一。髪の毛の端を頸部のあたりで切りそろえ、髻（もど
 り、頭の頂で結った髪）をくくって垂らしたもの。

紵け台（くけだい）…裁縫用具の一。着物などを仕立てる際、布地がたるまないように一
 端を吊っておく台。掛台。

こびん（小鬢）…鬢。鬢に関するちょっとした動作にいう語。

志賀唐崎…滋賀県大津市、琵琶湖南西岸にある景勝地。唐崎の一つ松があった。

ひめこまつ（姫小松）／ 姫子の松…「子の日の松」。正月初子（はつね）の日に、
 「子の日の遊び」（野に出て小松を引き若葉を引いて遊び、千代を祝って宴遊
 する行事）に引く松。

ゆりかけ髪（揺り掛け髪）…ゆらゆらとうち掛けられてある頭髪。「十七八の姫小松一の角
 立ち」（狂言歌謡）

(以上、広辞苑・日本古典文学全集を参照し、一部考察した。)

<松の舞>

風流より①	万集類の註(綾子舞離子舞「まつのみい」)②
千年さかいし若緑、 ごこんの色さきだて、 松こそめでたかりける	① 千年さか(栄)いしわかみどり(若緑) ① ご(五)こんのゑろ(色)さきだて まつ(松)こそめでたいかいきり
まづ正月門松、たれにをとらん飾つた② 門々の松よりたちやが松がすぐれた つかさくらいや高砂の、岸の姫松、 いくよりかはらのいろみそろはば松の色 にてそむいた	② まづ正月かとまつ(門松) ② たれにをとらんかさ(飾)った かと(門)かとのまつより たちやかまつ(松)がすぐれた つかさくらいやたかさご(高砂)の きせ(岸)のへめまつ(姫松) いくよりかはらのいろみそろはは まつのいろにてそむな
志賀唐崎の一つ松、 まつにふたつはなけれども、 松はかどのともして、松の緑を手にもち、 ゆい千年ともながむる かざり松の下より、 十七八の御(おん)上臈が、 きり下げ髪にかどたて、 おもしろをもて、そつとよつてつねつた やらしまないとおっしゃり、 くげたをとりのけ、 こびんに長どあたりはりまつ こびん長どはられて、 あらいたや、あらいたやと、 をつけてもにげたり、 あとよりやがておい松 おもいまりや、立ち帰りやんと、 腰を一寸しめてそ、 ひめこの松こそめでたかりける 松の舞これまで	③ しがからさき(志賀唐崎)のしと(一)つまつ ③ まつにふたつわ(は)なけれども まつわかど(門)のともして まつのみどりをて(手)にもち よわい(齡)千年ともなか(眺)むる かざりまつ(飾松)のしたより 十七八のをん上らう(御上臈)が きりさげがみ(切下髪)にかと(角)たて をもしろ(面白)をもてそとよつてつねつた やらしまないとをっしゃり くげたい(紵台)をとりのけ こびん(小鬢)長(丁)どはられて あらいたや あらいたやとをかゑふいてもこけたり あとよりやがとをいまつ(追松) おもいまつ(思松)やたちがいり(立帰)やんと こし(腰)をちよつとしめてそ しめこまつ(縮小松)こそめでたかりける まつのまい(舞)に

万集類の註(保教本「松ノ舞」)より㊦	万集類㊧
治ル御代ニ住吉ノ松コソ目出度カリ ① ケレ神宮皇后ノ弓矢ノ家ヲ守ラント 納シ法ノ <small>のり</small> 菅崎ノ松コソ目出度カリケレ	千年のわかみどり、 ① ここん(古今)のいろをみずして、 かはらぬ色をあらはす、 松こそめでたかりけれ
噺子 <small>つかさくらゐ</small> 爵位ハ高砂ノ尾上ノ松ゾ見事 ② ナ <small>こして</small> 扱越路ノ安宅ノ松モ候	あづまのをくにきこえたる、 ② あたか(安宅)の松の事やらん
唐崎ノ一ツ松是モ妙成ル名木何ヨリ ③ モ目出タキハ花ノ都ノ初メトテ正 月ノ門松立続タル門並町ヲ下リ通レ バ此方ノ松ゾ目出タキ 重宝アリト飾テ <small>し</small> 齒 <small>だ</small> 朶 <small>ゆずりは</small> 樑ノ陰ヨリモ 十七八ノ姫小松ユリカケ髪 <small>かどたち</small> ノ門立 此髪ヲ此髪ヲ櫛松ニテモケヅラバヤ堪カ タシト思ヒテ ソットヨッテツメレバシホナヤト云フマ マニ <small>こ</small> 胡鬼板ヲ取ナライテココラヲテウド ハリ松 カイフイテニグレバ跡ヨリ <small>やが</small> 頓テ追松 叶 <small>かなはし</small> ト思ヒテ松根ニヨッテ腰ヲ抱バ千年 ノ緑手ヲシメ此松ゾ目出度松ノ舞ハ是 ばかり計 古法ノ留ハ如此今ハ目出度ニテ留ル 彼ヨリモ万々年モ <small>さかゆく</small> 榮行御家ノ松ゾ目出度 御前ニテノ留ハ如此口伝	しが、らさき(志賀辛崎)の一つ松、 ③ 是もたへせぬ名木 なによりもめでたきは、 正月のかとまつ、たてならべたるおもしろ 町をくだりさがれば、 十七八のひめこまつ、 ゆりかけがみのかどだち そつとよつてつめれば、 しほなやといふまゝに、 こぎいた(胡鬼板)をとりなをし、 かしらをちやうどはりまつ ひつふいてにぐれば、 あとよりやがておいまつ、立帰、 せうこん(松根)によつてこしをだき手を、 しめこの松ぞめでたき

(梅津佳代子)

第2項 噺子舞「鶉舞」について

はじめに

ここで取り上げる「鶉舞」は、戦後段階で既に継承されておらず、下野・高原田両部落で上演不可能の演目とされている。近藤忠造氏の「綾子舞研究」(『国語研究』、1959年)の現行曲目一覧表を参考にすると、「鶉舞」は高原田の現行曲目となっているが、どのような経緯で行われなくなったのかについても不明確のままである。

また同表では『天正狂言本』から「鶉舞」を参考曲名として挙げている。これは天正年間の狂言様式を伝えるものであるが、ここに同名の噺子舞が見られる。この他、大蔵虎明本『万集類』にも「鶉舞」は見られ、「菊の舞」「松の舞」「打たる舞」と元同曲であった

ことが知られる。さらに笹野堅氏蔵三世鷺伝右衛門保教の『狂言伝書』における『小舞』にも「鶉」「松舞」という囃子舞があり、同曲であったと考えられている（保教本については原文を参照することができず、注として引用されたものを提示するにとどまった）。

本報告では、これらの「鶉舞」の詞章について、現詞章とされるもの、『万集類』における詞章、『万集類』の中には、[注]として保教本『狂言伝書』「鶉・綾子舞囃子舞「うすらまい」が示されているので、これらも比較対象として取りあげる。

またその他に、「鶉舞」が登場する『狂言集』を取り上げ、その内容と現存の「鶉舞」を比較する。綾子舞において囃子舞のひとつである「鶉舞」は、『狂言集』では名前だけで詞章はない。しかし同名の狂言謡が、同書に収録された狂言「木六駄」に登場する。

奉公人の太郎冠者が主人の言いつけで木を背負った牛6頭と炭を背負った牛6頭を連れて大雪の中を都へ向かう。寒さのあまり峠の茶屋に立ち寄り酒をもらおうとするが置いていないと言われ、主人から先方に渡すよう頼まれて預かった酒を飲んでしまう。その肴に舞を一番どうかと茶屋が太郎冠者に勧めた際、舞われるのがこの「鶉舞」である。

I 「鶉舞」現詞章

ここでは桑山太市氏の『新潟県民俗芸能誌』（錦正社、1972年）から「うづら舞」の詞章を引用する。

へこんにちのあそびに おん客来をもてなし 鶉一羽射んとて 白木の弓をとり出し ほこりを さつと払うて かかんとまとい をしやり やつと張つたり

へ小弓に小矢をとり 添い野へ そつと出でたり

へ天竺のうづらと 我朝の鶉と 五万ほど渡つた その中を見れば うそも そつとと まじつた

へ射てくれようと思つて やつと射たれば 当つた 当つた あたりとこは あたつたが 百間ほど ちがつた

へいかに 鶉よいめをしたに をもか 天竺の養由基は 雲居の雁も射落す 我朝では頼政 鶉と申す化鳥をたちまちしてはとるなり かほどこそなきとも 逃がしまいぞうづらよと ずんときつて放した

へとふのながいかさりまた これつもちこた あのまた鶉は 興がつた鶉で あそどここほかのって ちよこ ちよこ あゆんだ

へこのまた鶉は こへたうづらで かしら狸で 胴は とがめをのさき わひうたんだ

へあれは かな白だわ 弓も矢も いらぬ いや阿呆 いや阿呆 いや阿呆 手取らめにして呉れ

へうづら さめた まねた なをしやれ ほら ちよいと来いな やきとりにもしてくりよ うづら舞これまで

また、『古典芸能 綾子舞』（柏崎市綾子舞後援会編集、発行、1976年）からも囃子舞（5）うづら舞（明治高原田本）を引用する。両者についてはほとんど差異は見られず、典拠を同一のものとしていると考えて差し支えなからう。

へこんにちのあそびに おん客来をもてなし うづら一羽射んとて 白木の弓をとり出し
ほこりを さつと払うて か、んとまとい をしやり やつと張つたり
へ小弓に小矢をとり添へ野へそつと出でたり
へ天竺のうづらと 我朝のうづらと 五万ほどわたった その中を見れば うそも そつ
とと まじった
へ射てくれようと思つて やつと射たれば 当った 当った あたりとこは あたつたが 百
間ほど違つた
へいかに 鶉よいめをしたに をもか 天竺の養由基は 雲居の雁も射落す 我朝では頼政
鶴と申す化鳥を たちまちしてはとるなり かほどこそなきとも 逃しまいぞうづらよ
と ずっと切つてはなした
へとふのながいかさりまた これつもちこた あのきた鶉は興がった鶉で あそこどこほ
かのつて ちょこちょこ あゆんだ
へこのまた鶉は こつたうづらで かしら狸で 胴は とがめをのさき わひうたんだ
へあれは かな白だわ 弓も矢も いらぬ いや阿呆 いや阿呆 いや阿呆 手取らめにし
て呉れ
へうづら さめた まねた なをしゃれほら ちよいと来いな やきとりにもしてくりよ
うづら舞これまで

[注] この詞章における注釈を、以下に示す。

天竺 : てんじく。普通インドの呼称だが、この場合中国と考えた方が妥当ではないか。

我朝 : わがちょう。天竺に対して、日本か。

養由基 : ようゆうき。春秋時代の楚の人で、弓術の名人。

鶉 : ぬえ。トラツグミの異称。源頼政が射取つたという伝説上の怪獣。

手取らめ : てどらめ。手捕らまへ（＝手で捕まえること）か。

II 『万集類』における「鶉舞」

唯今のおさかなに、鶉一羽ゐんとて、弓取てをしはり、田のあぜをねらふた
あんのことく鶉が、たんだ一羽はふたり
いてくれうぞ鶉よ
あれほどの鶉に、弓も矢もいらぬぞ、手どらまへ」にしてくれう
かしましひぞ子共よ、はねをぬひてとらせうぞ
こぎにせよやまつごせ

ねらひよつてはひよつて、とらまへてみたれば、きやうがつたうつらで、なきやうが
ちがふた
なにと又なひたぞ
ものと又なひたよ
こきやろうとなひたは

[注1]

こぎ：胡鬼。コギノコ（胡鬼の子）は、子供が遊びに使うために、鳥の羽を差し込んだあ
る堅い木の実〔日ボ〕。コギイタは、女の子が、ある堅い木の実を空中に打ち上げ
て遊ぶのに使う小さな板（羽子板）〔日ボ〕。

[注2] 笹野堅氏蔵三世鷲伝右衛門保教の『狂言伝書』における「鶉」

保教本「鶉」（天正狂言本は曲名のみ）には次のようにある。

初春ノ慰（ナグサミ）ニ鶉一ツ射ントテ小弓ニ小矢（コヤ）ヲサシハゲ、アソコヤ爰ト
ネラフタ。囃子

サレバコソ鶉ガ爰ニ一ツ這（ハフ）タゾ。

漢朝の楊雄（ヤウユウ）ハ雲井ノ雁（カリ）ヲ射落ス我朝（ワカチヤウ）ノ頼政ハ鶉
（ヌエ）ト云ツシ癖者（クセモノ）ヲ矢一筋ニ射テ取ル夫程ニハナクトモ射テクレウゾ
鶉ヨ。

アレ程ノ鶉ニ弓モ矢モ無用シヤ手トラマヘニシテクレウ。

ダマレ子共羽（ハネ）ヲ抜（ヌイ）テヤラウニ胡鬼子（コギノコ）ニセイヤレ。

ケウガッタ鶉デチットモ騒（サハガ）ヌハ弓ノ下手（ヘタ）ト思フカ、ネラヒ寄り這
（ハヒ）寄、ネラヒ寄り這寄、能々（ヨウヨウ）見レ木（コ）ノ葉ジャ

[注3] 綾子舞囃子舞における「うすらまい」

綾子舞囃子舞「うすらまい（鶉舞）」には次のようにある。

こんにちのあそびにをんきゃくらい（御客来）をもてなしうすらいちは（一羽）い
（射）んとてしらき（白木）ふのよみ（弓）をとりいだしほこり（埃）さっとはらふ
てかかんの まといをしやりやっとはったり

こよみ（小弓）にこや（小矢）をとりそいの（野）い（へ）そっといでたり

天じく（竺）のうすらとは（我）がちよ（朝）のうすらと五万ほどははた（渡）った

そのなか（中）をみたりばうそもそっとなじた

い（射）てくりよとをも（思）てやっといたりばあたたあたたがあたりとこわあ
たたか 百けん（間）ほどちごうた

いかにうつら よいみをしたに をもか 天じくのよい（由）は くもい（雲居）もかい
（雁カ）もいとす わがちよ（朝）ではよりまさ（頼政）ぬい（鶉）ともす（申）け
ちよ（化鳥）を たちまちしてはとるなり かほどこうなきとも ぬが（逃）しまいぞう
すらよとすんときってはなしたや たへたふでは高村 矢大臣と申して如が（如何）下の
やすがしを あなどるからすらよと ずんときってはなした よのなかいかさりまた これ

つもち

あのまたうずらは ちちのたつたうすらで あそこどこほかのって ちょこちょこあよ
(歩) んだ

このまたうすら ごへたうすらで かしらたのきで どはとがめをのさきわへよたんだ
あればか(馬鹿)なうすらわよみ(弓)もや(矢)もいらん いやあんはいいやあんは
いいやあんはいてどら(手取)めにしてくりう

うすらさめたまねたなをしゃれほ ちよと(一寸)こ(来)いな やきとり(焼鳥)にも
してくりよう

うすらまい これまで

Ⅲ 狂言「木六駄」(日本古典全書『狂言集・中』)から鶉舞抜粋

[シテ] 鶉舞を見まいな見まいな。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] 唯今のお肴に鶉一羽射んとて、小弓に小矢を取り添え、あそこやここと探いた。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] さればこそ鶉が、五萬ばかり下りたぞ。多き鳥の事なれば、うそもちつと交つた。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] 興有つた鶉で、一羽も騒がぬは、弓の下手と思ふか。唐土の養由は、雲居の雁を
射落す。わが朝の頼政は鶴と言へる化け物を、矢の下に射伏せた。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] それ程には無くとも、射てくれうぞ鶉と、一の矢を番へて、よつ引きやうと放せ
ば、一の矢は外れた。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] 二の矢でして退けう。二の矢もひよろひよろ。静まれわらんべ。そのやうに笑ふ
な。三の矢で射て取つて、羽根を抜いて取らせうぞ。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] 三の矢もこそ三の矢もこそ。これ程の鶉に、弓も矢も無用な。五羽も三羽も一度
に、手取りにしてくれう。手取りにせんとして、狙ひ寄つて這ひ寄つて這ひ寄つて、
まんまと側へ寄つたれば、ぱつと逃げてしまうた。

[茶屋] 鶉舞を見まいな見まいな。

[シテ] 餘りの事のをかしさに、物とこそは謡うた。

[茶屋] それは何と謡うた。

[シテ] 鳥は残らず逃げたれば、「鶉なくなる深草山よ。」(笑)

[茶屋] やんやんやんやんや。

[注]『狂言集』を参考に、この狂言の注釈を以下に示す。

- 見まいな : 見「ませい」の約か、「ませい」は「坐す」の使役形に助詞「い」の添った、「なさい」の意。これに「な」が加わり、「見なさいな」の意となる。
- うそ : 「鶯」と「嘘」とをかけて言う。
- 興有つた : 面白い、興がった。
- 雲居 : 雲のあるところ、つまり空。
- 頼政 : 源三位入道。
- 番へて : つがえて、「つがう」は「継ぎ合う」のことで、弓と矢を組み合わせるの意。
- よつ引き : よっぴき、充分に引き絞り。
- ひやう : 矢声の擬音。
- まんまと : 「うまうまと」の約、首尾よく。
- 物とこそは : 漠然と対象物を指し、答える場合、念を押すのに置く語。
- 「鶉なく…」 : 千載集、巻四の俊成作「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」を引き、「鳴くなり」に「無くなる」をかけて言う。
- やんや : 喝采の褒め言葉

IV 詞章の比較

○I (現詞章) と II (『万集類』「鶉舞」) の比較

『万集類』における「鶉舞」の詞章の内容は、現詞章とはかなり異なった内容になっている。冒頭の「唯今のおさかなに」の部分は、現詞章では「こんにちのあそびに」となっている。また現詞章で言われている中国と日本の鶉についてのことや、養由基・頼政のことは『万集類』の方では言われていない。逆に『万集類』の方にだけ見られるのは、騒ぐ子供たちを黙らせ、抜き取らせた鶉の羽を胡鬼の子をつくるのに用いさせようとする部分である。つかまえた鶉は、現詞章では、ちょこちょこ歩いたと言われているのに対し、『万集類』では鳴き方が珍しいものであったと言われている。

○I (現詞章) と II [注2] (保教本『狂言伝書』「鶉」) の比較

保教本『狂言伝書』における「鶉」の詞章の内容は、『万集類』と同様に現詞章とは内容的に大きく異なっているが、『万集類』・現詞章の両方との相違点・共通点が見られる。冒頭は「初春ノ慰ニ」で始まり、中国(漢朝)の楊雄が雁を、日本の頼政が鶉を射落としたことが述べられるが、この点は現詞章と共通している。また、弓矢を用いずに素手で鶉を捕らえてやろうという部分は、ここで取りあげた全ての詞章に共通していた。また、騒ぐ子供たちを黙らせ、抜き取らせた鶉の羽を胡鬼の子をつくるのに用いさせようとする部分は『万集類』と共通しているが、静かな鶉だと思って近づいてみたところそれが「木ノ葉」であったというのはこの詞章だけである。

○I (現詞章) と II [注3] (綾子舞囃子舞「うすらまい」) の比較

表題からもわかるようにこの二者は同一のものと考えられるが、詞章の内容から判断しても間違いのないものと思われる。両者とも9行で構成されているが、大きく異なる点を

一箇所あげると、5行目で「うすらまい」では、「たへたふでは高村 矢大臣と申して如が（如何）下のやすがしを あなどるからすらよと ずんときってはなした」という部分が見られるのに対し、現詞章ではこれが抜け落ちていることである。「うすらまい」の詞章は一部の数字を除いたほとんどの箇所が仮名によって復元されており、この箇所の注釈を取することは困難であった。また詳細な点で差異を示すと、言葉の言い方を違えているところが数箇所見られる。とくに音便によるものが多いが、これらは現詞章と「うすらまい」の内容において仮名の表記と実際の発音との間にどれだけ異同があるかという問題も含んでいる。具体的には、〈現詞章〉←〈「うすらまい」〉としてそれぞれ、〈おん客〉←〈をんきゃくらい〉、〈見たれば〉←〈みたりば〉、〈よいめを〉←〈よいみを〉、〈かほどこそ〉←〈かほどこう〉、〈かしら狸 [たぬきカ]〉←〈かしらたのき〉などである。

○I（現詞章）とⅢ（「木六駄」）の比較

「木六駄」における舞では、場面転換に「鶉舞を見まいな」という囃子詞が入る。「木六駄」の舞と現詞章でそれぞれ、「唯今のお肴に」と「こんにちのあそびに おん客をもてなし」、「あそこやこと探いた」と「野へ そつと出たり」、「唐土」と「天竺」などの違いが見られる中で、五万の鶉の中に鶯がいた点、楚国の養由基が雲の上の雁を、源頼政が鶴をそれぞれ射取った点が一致している。面白がった（「興有った」と「興がつた」）鶉が両方に登場するが、それぞれ射手を下手だとばかりにするものと「ちょこ ちょこ」歩くものである。また弓も矢も捨て手捕りに使用という部分は、「木六駄」では3回失敗した後のことだが、現詞章はそうでない。締めくりは大きく違い、それぞれ可笑しさのあまり和歌を引用して謡うものと、「やきとりにもしてくりよ」というものである。

全体の構成には大差がなく、同一のものが定着したと考えられる。現在の鶉舞は、それがより大衆向けのものとして定着したことが「こんにちのあそびに おん客をもてなし」からうかがえる。また物語の展開は、「木六駄」の方が三本の矢を用いたりする点などから、より面白く感じられる。現詞章はこの話を知っていれば思い出すような可笑しさがあるであろうが、それ自体だけでは物語としての凹凸がなく、わかりにくい。だが狂言謡と囃子舞詞章という目的の差異を見ると、現詞章の方では言葉そのものによるリズムのよさが重視されているようにも思われる。それを理由とした物語の語法の変化と考えることもできよう。

（笹川 良平）

第3項 肴さし舞

現在、高原田・下野両地区で残されており、どちらの地区でも上演可能である。平成15年の綾子舞現地公開の際には、9年ぶりに披露された。

肴さし舞の内容は、数え歌のようであり、一日は一つ冷や水、三日は三つ蜜柑、五日は五つはいり豆、七日は七つ茄子、十日は野老（ところ）の毛を挙げて、その様子を調子よく唄っているものである。

1. 詞章

① 『柏崎市史資料集民俗編』所収

へ四ての四はの 四とへめぐり ちやはんのなかにへやみづくんとて
 あたいわ四やり こなたいわ四やり ひやりひやりと ひやつくところを
 さいてくりよとをもて まかなちよ四にかまいて 四くとさいてをた
 へみかの四わの みつみかんの かわわちんび ちんびのかはで
 なてもないところを さいてくりよとをもて まこなちよ四にかまいて
 四くとさんいてをもた
 へ五かの四わの いつつりまめ ほんのうちに あなたいそろり こなたいわそろり
 そろりとそろつくところを さいてくりよをもて 四くとさいてをもた
 へなのかの四わのなつむすび まがきのいたのほそきのいたに
 なりさがたところを あなたいはひやり こなたいわひやり
 ひやりひやりとひやつくところを さいてくりよとをもて
 まこなちよ四にかまいて 四くとさいてをもた
 へとかの四はの とんにところ けのはいたところを
 あなたいはひやり こなたいはひやり ひやりひやりとむしやつくところを
 さいてくりよとをもて まこなちよ四にかまいて 四くとさとてをもた
 さかなさ四 これまで

② 綾子舞後援会・同保存会『綾子舞への案内』（昭和46年）所収

へ肴さいたと囃された
 肴さいた 見さいなへ
 肴さいた見さいな 肴さいた見さいなへ
 へへての日はのう ひとつはひめぐり
 茶碗のなかに 冷水汲んで あなたへひやり こなたへひやり
 ひやり ひやりと ひやつくところをさしてくりうと思って
 まつての調子に構えて しつくと差して おっ取った
 肴さいた見さいなへ
 へ三日の日はのう 三つはみかん
 ちんびの皮のなんでもない所をさしてくれりよと思うて
 まつこの調子に構えて しつくと差して おっ取った
 肴さいた 見さいなへ
 へ五日の日はのう 五ツいり豆お盆のうちに あなたへごろり こなたへごろり
 ごろり ごろりと ごろつく所を さしてくれようと思って
 まつこの調子に構えて てんてこ すってこ てんへ てこへへ
 てこてんてこてん こら まだささんねエ
 肴さいた 見さいなへ

へ七日の日はのう セツなすび まがきの枝の細木の枝に なり下つた所を
 あなたへは ぶらり こなたへはぶらり ぶらり ぶらりと ぶらつく所を
 差いてくれりようと思つて まず こんな調子に構いて
 しつくと 差して おつ取つた
 肴さいて 見さいなへ

へ十日の日はのう 十にところ毛の生えたところ
 あなたへはむしやり こなたへはむしやり むしやり むしやりとむしやつく所を
 さしてくれりようと思つて まつこの調子に構えて しつくと差して おつ取つた
 肴さいた 見さいなへ
 肴さし舞 これまで

③ 桑山太市『新潟県民俗芸能誌』（昭和47年）所収

へ肴さいたと囃やされた 肴さいた 見さいなへ
 肴さいた 見さいな 肴さいた 見さいなへ

へしての日はのう 一つひめぐり 茶碗のなかに冷水汲んで
 あなたへはひやり こなたへはひやり ひやり ひやりと ひやつくところを
 さしてくりようと思つて まづこの調子に構えて しつくと差しておつ取つた
 肴さいた 見さいなへ

へ三日の日はのう 三つ蜜柑 皮はちんぴ ちんぴの皮の
 おんでもない所を差して呉りよと思ふて まづこの調子に構えて
 しつくと差して おつ取つた
 肴さいた 見さいな

へ五日の日はのう 五ついり豆 盆のうちに あなたへごろり こなたへごろり
 ごろりごろりと ごろつく所を さして呉りようと思つて
 まつこの調子に構えて てんてこ すつてこ てんへ てこへへ
 てこ てんてこてん こら まだささんねエ
 肴さいた 見さいなへ

へ七日の日はのう 七つ茄子び 籬のあいの細木の枝に なり下つた所を
 あなたへはぶらり こなたへはぶらり ぶらり ぶらりとぶらつく所を
 差して呉りようと思つて まづ こんな調子に構えて
 しつくと差して おつ取つた
 肴さいた 見さいな

へ十日の日はのう 十にところ 毛の生えたところ
 あなたへはむしやり こなたへはむしやり むしやり むしやりと むしやつく所を
 さして呉りようと思つて まつこの調子に構えて しつくと差して おつ取つた
 肴さいた 見さいなへ
 肴さし舞 これまで

④ 『出羽・本歌・入羽—綾子舞、21世紀への伝承—』所収・・・現行曲

()内は下野の歌詞

へ肴さいたと囃された

肴さいた見さいな 肴さいた見さいな

(繰返し)

へ(へ)しての日はのウ 一つひめぐり(姫栗) 茶碗の中に(えりえの内に)

冷水汲んで(下野は省略) あなたへはひやり(彼方へはさり)

こなたへはひやり(さり) ひやりひやりと(さりさり)

ひやつく(さいつく)ところを 差してくりよと思うて

まずこの(まっこの)調子に構えて しっかりと差して おとった

肴さいた 見さいな 見さいな

へ三日の日はのウ 三つ蜜柑 皮はちんぴ(珍味)

ちんぴ(珍味)の皮の なんでもないところを

差してくりよと思って まずこの調子に構えて

しっかりと差して おとった

肴さいた 見さいな 見さいな

へ五日の日はのウ 五ついり豆 お盆(丸盆)のうちに

あなた(彼方)へ(へは) ごろり こなたへ(へは) ごろり

ごろり ごろりと ごろつくところを 差してくりよと思うて まっこの調子に構えて

てんてこ すってこ てんてん てこてこてこ

てんてこてん こらまだささんねエ(この二行部分は「しっかりと差しておとった」)

肴さいた 見さいな 見さいな

へ七日の日はのウ 七つ茄子 まがきのあいの 細木の枝に なり下ったところを

(「まがき～枝に」は省略)

あなた(彼方)へはぶらり こなたへはぶらり ぶらり ぶらりと ぶらつくところを

差してくりよと思って 差してくりよと思って まずこの調子に構えて

しっかりと差して おとった

肴さいた 見さいな 見さいな

へ十日の日はのウ 十のところ 毛の生えたところを

あなた(彼方)へはむしゃり こなたへはむしゃり

むしゃり むしゃりとむしゃつく所を

差してくりよと思って まずこの調子に構えて

しっかりと差して おとった

肴さいた 見さいな 見さいな

肴さし舞これまで

⑤ 『綾子舞伝承500年祭』所収（平成15年）（高原田）

肴さいたと囃された 肴さいた見さいな 肴さいた見さいな

しての日はのウ 一つひめぐり 茶碗の中に
冷や水汲んで あなたへはひやり こなたへはひやり
ひやりひやりと ひやつくところを差してくりよと思うて

※まっこの調子に構えて しっくと差して おとつた
肴さいた 見さいな 肴さいた 見さいな

三日の日はのウ 三つ蜜柑 皮はちんぴ
ちんぴの皮の なんでもないとこを差してくりよと思うて
（※繰り返し）

五日の日はのウ 五ついり豆 お盆のうちに
あなたへはごろり こなたへはごろり ごろりごろりと
ごろつくところを 差してくりよと思うて

まっこの調子に構えて てんてこ すってこ てんてん
てこてこてこ てんてこてん こらまだささんねエ
肴さいた 見さいな 見さいな

七日の日はのウ 七つ茄子 まがきのあいの
細木の枝に なり下がったところを
あなたへはぶらり こなたへはぶらり
ぶらり ぶらりと ぶらつくところを 差してくりよと思うて
（※繰り返し）

十日の日はのウ 十にところ 毛の生えたところを
あなたへはむしゃり こなたへはむしゃり
むしゃり むしゃりと むしゃつく所を差してくりよと思うて
（※繰り返し）

肴さし舞これまで

2. 詞章の移動

まず最初に、現行曲としている『出羽・本歌・入羽—綾子舞、21世紀への伝承—』所収のものの中に下野と高原田のものがあるので、それについて見ていく。

高原田	下野
冒頭の「肴さいた見さいな」繰り返し 無	冒頭の「肴さいた見さいな」繰り返し 有
一日－「茶碗の中に」	「えりえの内に」
一日－擬態語 ひやり	さらり
「あなた」	「彼方」
三日－「ちんぴ」	「珍味」
五日－「お盆」	「丸盆」
五日－最後に豆をさすことができない	最後に豆をさすことができる
七日－「まがき～枝に」部分 有り	「まがき～枝に」部分 省略

以上、高原田と下野での異なる点を挙げた。

○『柏崎市史資料集民俗編』と他の本

- ・冒頭部分「肴さいたと囃された～肴さいた見さいな」がない
- ・「肴さいた見さいな」と囃している部分がない
- ・擬態語部分が他のものと異なっている
ex.五日 ごろり⇔さらり、七日 ぶらり⇔ひやり、十日 むしやり⇔ひやり
(但し、十日の部分は「ひやり ひやりと むしやつく所を」となっており、途中から他の本と同じになっている)
- ・「まずこの調子に構えて」⇔「ま かな ちよ四にかまいて」
- ・五日 現行の下野と同様に豆をさすことができる
- ・七日は現行以外は全て茄子になっている→しかし、平成15年の公演においてパンフレットの詞章では「茄子」の表記であったが、「なすび」と歌っていたことから単なる表記の違いであると考えられる。
- ・七日の「まがき～」の部分にばらつきが見られる
①・②・⑤「まがきのあいの細木の枝に」、③「まがきの枝の細木の枝に」、④「まがきの板の細木のいたに」

3. 考察

『柏崎市史資料集民俗編』に関する違いは、おそらく聞き書きを行う際に起こった違いであると考えられる。

『出羽・本歌・入羽—綾子舞、21世紀への伝承—』における下野・高原田での違いには「彼方」・「あなた」の点に関して、意味上に違いは見られず、現代語に直したのではないだろ

うか。また、五日の内容に関してほかのものではすべて最後に豆をさすことができずにいるのに対して、『柏崎市史資料集民俗編』と下野の現行曲だけが豆をさすことができる点は気になるところである。五日の部分が差すことができずにいる所に面白さがあると考えて後から付けられたものなのであろうか。

七日の「まがき～」部分のばらつきについては、分からない。

この歌に関しては、長い年月の間に少しずつ変化したと思われる要素がある。下野と高原田の間での相違点に関して、下野の方が現代の言葉に直されていると思われる箇所がある。また、後の注釈で触れるが、三日の部分で本によって「ちんび」・「ちんび」・「珍味」という違いが出ている。これも「ちんび」と「珍味」とは同じ意味であり、「珍味」の方が現代の言葉に直されていると考えることができる。伝統を伝える中で演じ手にとって分かりやすい言葉へと変えて伝えることがあったのであろう。

4. 注釈（『出羽・本歌・入羽—綾子舞、21世紀への伝承—』）

※注釈に際しては、他の本との一致箇所の多い高原田のものを使用する

肴さいた⁽¹⁾と囃された

肴さいた見さいな⁽²⁾ 肴さいた見さいな

して⁽³⁾の日はのウ 一つひめぐり 茶碗の中⁽⁴⁾に

冷水汲んで あなたへはひやり

こなたへはひやり ひやりひやりと

ひやつくところを 差してくりよと思うて

まずこの調子に構えて しっかりと差して おととった

肴さいた 見さいな 見さいな

三日の日はのウ 三つ蜜柑 皮はちんび⁽⁵⁾

ちんびの皮の なんでもないところを

差してくりよと思って まずこの調子に構えて

しっかりと差して おととった

肴さいた 見さいな 見さいな

五日の日はのウ 五ついり豆 お盆のうちに

あなたへごろり こなたへごろり

ごろり ごろりと ごろつくところを 差してくりよと思うて まずこの調子に構えて

てんてこ すってこ てんてん てこてこてこ

てんてこてん こらまだささんねエ

肴さいた 見さいな 見さいな

七日の日はのウ 七つ茄子⁽⁶⁾ まがきのあい⁽⁷⁾の 細木の枝に なり下がったところを

あなたへはぶらり こなたへはぶらり ぶらり ぶらりと ぶらつくところを

差してくりよと思って 差してくりよと思って まずこの調子に構えて

しっかりと差して おととった

肴さいた 見さいな 見さいな
十日の日はのウ 十にところ⁽⁸⁾ 毛の生えたところを
あなたへはむしゃり こなたへはむしゃり
むしゃり むしゃりとむしゃつく所を 差してくりよと思って
差してくりよと思って まずこの調子に構えて
しゅくと差して おとった
肴さいた 見さいな 見さいな
肴さし舞これまで

解釈

(1) 肴さいた…肴をさした

現地公開の際には「肴さした」と歌っていた。

(2) 見さいな…見てくださいな

(3) して…本によっては、へてとするものもあるが、して、へて、ともによく分からない。おそらく一日を指すものと思われる。方言か。

(4) 茶碗の中に…現地公開の際には「茶碗のうちに」と歌われていた。中をうちと読んでいる。

これに関しては、現行曲において下野がこの部分を「えりえの内に」としていることと共通している。(えりえの意味については不明)

(5) ちんび (陳皮)…生薬の一種。ミカンの黄熟した果皮で芳香性で苦味がある。健胃・鎮咳・去痰剤として用いる。

他の本の同じ箇所には、ちんびの他に「ちんび」、「珍味」の語が出てくる。

ちんび (珍美)…飲食物のめずらしく美味なこと。また、そのもの。珍味。

→この箇所に関しては、「ちんび」、「ちんび」、「珍味」の3通りの言葉がでてきくる。

最も古いと考えられる『柏崎市史資料集民俗編』所収のものによると「ちんび」となる。これは、「珍味」と同じ意味であることが分かる。「ちんび」は蜜柑に連想されて出てきたものだろうか。

(6) 茄子…なすびと読むか。

今年の現地公開の際には、パンフレットの記述では「茄子」となっているが、「なすび」と歌っていたため。

(7) まがきのあいの…まがき：竹や柴などで目をあらく編んだ垣。

あい：間

(8) ところ (野老)…植物「おにどころ (鬼野老)」の別名。

おにどころ…ヤマイモ科の山野にはえるつる性の多年生草。

長寿を祝うため正月の飾りに使い、そのひげ根を老人のひげ根にたとえ、ちようどエビを海老と書くように、山にはえるというので野老と書く。

(村山智英)

第六章 綾子舞の調査・考察－狂言の場合－

第一節 狂言考察の方法

狂言に関しては、狂言本に残された同曲と推察される曲と、次のような比較を中心とした考察と調査を行った。曲目は次の通りである。

閻魔王・烏帽子折れ・伊勢遷し、三条小鍛冶・海老すくい・布晒し・龍沙川・明神狂れ・佐渡亡魂・掬摸・鐘引・唐猫

イ. 『狂言集』（日本古典全書）

ロ. 西山町石井神社の太夫舞

ハ. 現行のもの a 下野

b 高原田

検討事項

①イとハ（a・b）との比較

②ロとハ（a・b）間の比較

③ aとbの比較

考察事項

①現詞章の注釈を行う

②古詞章と綾子舞の狂言との関係

③高原田と下野の狂言との関係

④伝承経路など全般的考察

第二節 綾子舞の狂言について

はじめに－綾子舞の狂言について

【概要】

綾子舞の狂言について、はっきりした文献があるわけではないが、徳川中期のころに京都の寺侍・茂田茂太夫という狂言師が夫婦できて住みつき、高橋の姓を名乗った際に茂太夫は高原田に、婦は下野に教えたものだと言えられたとされている。また、室町時代の狂言を伝えている可能性もあるという。しかし、前者の説に基づき、高原田のものは振りがややごつごつとしていて、下野は柔らかい味があるといわれている。武家の洗練された能・狂言とは異なり、綾子舞の狂言は、中央の能狂言風のもの、地域性のある自由な形での地狂言風のもの、その他のものがあり、33番が伝えられた。現在は天正6年に作られた狂言天正本を最古とし、5つの本に狂言の記述がある。

以下、本田安次氏の『日本の民俗芸能 語り物・風流2』の分類を参考にし、伝わったとされる狂言33番を示す。

[能狂言風]	海老すくい・閻魔王（朝比奈）・布晒し・烏帽子折・石山詣・祐全・楽阿弥・唐猫・鐘の音
[地狂言風]	三條小鍛冶（宗近）・金引（鐘引）・龍沙河・明神狂れ・佐渡亡魂・大熊川・伊勢遷し・鐘巻・竹生島・謎・鉢こくり
[その他]	都遷し・鉢の木・太刀盗人・日高川（道成寺）・文字かねえ・盆忘れ・壬生詣・曼荼羅・塩売り・手違い・掏摸・芋洗い・はっちゃんぼう・供税

なお、高原田で「閻魔王」と呼ばれるものが、下野で「朝比奈」と呼ばれているように、明らかに同一曲でありながら、両地域によって曲名を異とするものがある。また、地域に関係なく、2種類の言い方で呼ばれるものもある。よってそれらは括弧書きとした。

そして、28番の中で、戦後まで伝承された演目を、平成8年の「綾子舞パンフレット」より転載した。現在上演できるものを※で表す。こうしてみると、高原田と下野で同様に演じられているものと片方でしか演じられていないものがあることがわかる。

○ 高原田

※海老すくい

※閻魔王

※掏摸

※鐘引

烏帽子折れ

※唐猫

三條の小鍛冶

龍沙川

※明神狂れ

伊勢遷し

○ 下野

※三條の小鍛冶

※閻魔王（朝比奈）

※海老すくい

※布晒し

※龍沙川

明神狂れ

※佐渡亡魂

狂言の支度は様々であるが、頭には役により冠や烏帽子をかぶり、黒紋付の上に直衣、狩衣、袴等をつける。冠者や下人はこの袴の下が裁着（たっつけ：裾をひもでくるようにしたもの）になる。これらの狂言は舞の様式が古風で、今の能・狂言が武家の趣味にしたがって洗練されたものとすれば、これは民間に入ったまま、昔の素朴さやはつらつとした面白みを残し伝わったといえる。また、中央では廃曲となった狂言も伝えていて、貴重なものされている。

（高山百合）

第三節 狂言の調査・考察

第1項 烏帽子折

【詞章】

『柏崎市史資料集 民俗編』

ゑぼしおり

との「弓や八幡大明、明日は、種武士のつきあい。なんにも事をかかんが。いぼしにばつと事をかいておる。これにつき くわしやをよびいだし。都へ。いぼしおりにやら一かと存ずる。くわじや おるか。やいくわじや

くわじや「ほー おんまいに。

との「だて

くわじや「ほー

との「やい きくか

くわじや「ほー

との「なんじ ゆびいだすは。べつぎでなし。明日は種武士のつきあい、なんにも事をかかんが。いぼしに。ばつと事をかいてある

くわじや「ほー いぼしに お事をおかきなさましたか。

との「おー なか〜 なんじ都ゑぼし折にいつてまいれ。はよーまいつてあるな。

くじや「ほー おとのさまの、おひざもとを、へじくりてんものか、はよー まいられませうか、

との「おー それもるすつぎ いそが為め、はよーまいれ

との「いい

くじや「はつ

くじや「さても〜 おらおとのさまは、づーとこわいおとのさまでござります、いまのことお いまいまとおせられます、なれ共 なくことしゆーにわ かたれんものだとござります いやいや都さしていそぎませう いそぐにほどなく 都へつきました。都広うござります。いやいやこれから たなもの見物致しませう」こちらにわ。けつこーなものを出しておかせられました。きんらん どんす あや にしき、いんらー さげぎやまでだしておかせられました、いやいやこちらのたな物見物致しませう。こちらにわ、なほけつこーなものお出しておかせられました、たんぼんぼん、ふりつづみまで出しておかせられました、いやいや このよーにたなもの見物ばかりしていは。おられますまい。そろそろ いぼしをたずねませう。こちらにわ いぼしわござりませんか むしい。いぼしはこちらにはない むしい こちらにはいぼしわござりませんか むしい。いぼしは町方にないものだ むしい。いぼしは五郎太夫にある むしい。いやいや五郎太夫おさられて いそぎませう、いそぐにほどなく 五郎太夫へ着きました。五郎太夫に案内を乞いませう、五郎太夫は御宿に候か 五郎太夫

五郎太夫「五郎太夫はありおーて候は どなたでござります

くわじや「どなたかもわすれました

五郎太夫「さても さてもおいてこられたお人かな

くわじや「それがしが国元を立つときは うしさまをせなかにしよい。よさは西へ西へ
といらせられました

五「おー それは東の国でござりましょー。東の国はどなたでござります。

くわじや「どなたかもわすれました

五「さてもさても おいてこられたお人かな

くわじや「それがしがたのまれた御人は、たしか。いしいとやらでござります

五「おー それはしなのの国でござりませう しなのの国はどなたでござります

くわじや「どなただかもわすれました

五「さてもさても おいでこられた御人かな

くわじや「それがしが たのまれたとのさまわ たしか左御まげとやらでござります

五「おー それは左おりのこととござりませう。それ左おり。めそーづる御方は 源士が
たてわ牛若君 平けい方では、むくわんの太夫あつもり様にほかに、めそーづる御方は
ござりません、いほしにもだんだん 御なかござります それ天じく しゃくそんは、
ばつたいがのほりにて、ねはんのぞーおたてたもー、しゃくそんさらしおうぎよー
は、木の元に向ってねはんの雲にかくれたまう名とつばは人ひよす 星とつばは
日月しよする それ星のくどく 東国大名のいほしにわ よいのみよーじよ二ツ星 中
国大名のいほしにわ よなかのみよーじよ三ツ光 西国大名のいほしにわしほんのくも
にみかづきさん 北国大名のいほしにわ あまのがわらにたなばた星 おーしよ大名の
いほしわ 五色の雲にあか月のみよじよーかよーでござります いほしは心意ました。
折てあげませう。宿いさがりて休ませられ

五「いい

くわじや「はつ

との「太郎くわじやを都へ いほし折りにやつたれど いまにてかいらん それに付 治
郎くわじやお よびいだし。太郎くわじやの向ひにやろーかと存ずる、くじやおるか
治郎くわじや

くわじや「ほー

との「おるか

次「おんまいに

との「立て

次「ほー

との「やい きくか。

次「ほー

との「なんじ ゆびいだすもべつぎでなし 太郎くわじやを都へ いほし折にやつたれ共
いまにて帰らん なんじ都へ太郎くわじやの向ひにいつてまいれ

次「ほー

との「はよーまいつてあるな

次「ほー まだおとのさまのおはなもといも おひじくり出んものがはよーまいられませうか

との「ほー それもるすのぎ いそがせる為め はよーまいれ いいハツ

次郎「さてもさても おらおとのさまわ こわいおとのさでござります いまの事 いまいまとおせられます あんなとのさまに三年も十六年もつかわれたなら 頸の皮のただき皮のなめし皮になるかもせん いやいやなつたかしら まだ なりもせんなれ共なくことしよーにはかたれん物だどござります いやいや都さしていそきませう きたり いやいやにほどなく都へ着きました 都 広ござります まずはや 一条は今出川 三条堀川 三条立出 四条室町 五条油らの郡まで のらーりのつと着きました いやいやたなもの見物致しませう、こちらにはけつこーな物を出しておかせられました まづはや つちで作くったいのこ ごー目まじくじとさしておかせられました こちらを見物致しませう、こちらにはわ、いんろー さげざやまで出しておかせられました、あいったしやあいったし いがぐりの技折まで出しておかせられました いやいや たな物見物ばかりしては居られません そろそろ太郎くわじやおたづねませう こちらには太郎くわじやおられませんか むしい。おられません むしい こちらには太郎くわじやおられませんか むしい おられませんか むしい さてもさても このよーに太郎くわじやをよばつて見ませう 太郎くわじや太郎くわじや、あこに見ゆるは太郎くわじや さーに見いる ちつと、とがめて見ませう アソコニ見エルハ 太郎くわじやでないか

太郎「さうまうすは次郎くわじやでないか まつたお前はおんと、て

次郎「おまいのきよーがおそいとて おとのさまがむかひにゆこされました まきになつて居り候

太郎「ふん おらおとのさまのくせとして 物の毛に火の付いたるごとく ちりちりとおせられます

次郎「まっきになつて居られます。

太郎「さてもさても それがしわ主のやかたをわすれました

次郎「ふん しゆーのやかたをわすれるよーな物がある物か それがしがいつて見てきませう それかしもわすれました

太郎「それがしは長の道中のことなれ共 おまいは昨日や今日きて はやわすれるとわ

次郎「のの それがしが国元を立つときは とのさまのしちほこの上に 烏とすずめ親子居りました

太郎「あれは親子ではありません

次郎「いい親子でござります 烏は上にいて子か子かと申します すずめは下にいて 父と申します あれは親子でござります

次「それがしがいつて見て来ます。

太「あつコリヤコリヤ あれは羽根があつて立つとのでござります

太郎「もうたつたでござりませうのの それがしがとのさまは うきじんの神くりのぴよ

たん おがらにさし 川中島へ ぐーと ほかいたるよーな きのかんだ 御人でございます はやしもんにしていつたら 多くは出られるでござりませう 一つはやして見ませうなか へ

歌 しなのの国の住人と、おそどの子供と六とど六といほし居りに出たれば いほし居らんで しよーのやかたわすれた あれがしよーのやかたか これしよーのやかたか はやしもんにもしてきた

林 いい げにもそーやよ げにそーもな、まづはけんぞくでかいた、さても きんぞくでかいた、で かいたりや くわいた、まづ きんぞく出かいた

との「まだもあらばききませう

東国大名のいほしには 上のみよーじよー二ツ星 いい げにもそーやよ げにもそーもな、まつげ きんぞくでかいた さても きんぞくでかたりや くわた まずわ きんぞく出かいた

中国大名のいほしには よ中のみよーじよ 三ツ光

西国大名のいほしは しほんの雲に三日月様

北国大名のいほしには あまのがわらにたなばたぼし

奥州大名のいほしには 五色の雲にあかつきのみよじよ

以上中西北奥州 おのおの 東国の林付ける事

あの日を見さいな 山の端にかかた いい かかたかかた 山のはにかかた いい かかたかかた 山の端にかかた 山のはにかかた めんめん さりりと。ふめばほろりと。おつるとも、まりかいだにとまた とまたとまた まりがいだにとまた。こっばいしよらは おししのし——

五百八十年めでと一候

以上

『新潟県民俗芸能誌』

との 弓矢八幡大明神、明日は諸武士のつきあひ。何んにも、事を欠かんが、烏帽子にはハツと事を欠いておる。これにつき冠者を呼び出し、都へ、烏帽子折りにやらうかと存ずる。冠者、おるかや、冠者。

太郎冠者 ほう、おん前に。

との さて。

太郎冠者 ほう。

との やい、きくか。

太郎冠者 ほう。

との なんじ、呼び出すは、別儀ではなし。明日は、諸さむらいの突き合ひ、何んにも事をかかんが、烏帽子に、ハツたと、事を欠いてある。

太郎冠者 ほう、烏帽子に、お事をお欠きなさいましたか。

との おう、なかへ、なんじ、都に、烏帽子折に行つてまゐれ。早う、参つてあるな。

太郎冠者 ほう、お殿様のお膝もとを、へじくりてんものか、早う参られませうか。
との おう、それも、るすつぎ、いそがため早う参れ。

太郎冠者 はッ。

との いい。

太郎冠者 さても〜、おらア、お殿様は、ずッとこわい、お殿様でござります。いまのことを、いま〜とお仰せられます。なれ共、泣くこと衆には、かたれんものだと御座ります。イヤ〜、都をさして、急ぎませう。急ぐに、程なく、都へつきました。都は広うござります。イヤ〜、これから、たなもの見物致しませう。こちらには、結構なものを出して、おかせられました。金襴緞子、綾にしき、印籠、提鞆まで、出しておかせられました。イヤ〜、こちらのたな（店）もの見物致しませう。こちらには、なお結構なものを出しておかせられました。たんぽんぽん、振りつづみまで、出しておかせられました。イヤ〜、このやうに、たなもの見物ばかりしては、おられますまい。そろ〜、烏帽子をたづねませう。こちらには、烏帽子はござりせんか、むしい、烏帽子は、こちらには、ない、むらしい。こちらには、烏帽子はござりませんかむしい。ないむし、烏帽子は、町方にないものだむしい。烏帽子は、五郎太夫にあるむしい。イヤ〜、五郎太夫をさして、急ぎませう。いそぐに、程なく五郎太夫へ着きました。五郎太夫に案内を乞ひませう。五郎太夫はお宿に候か、五郎太夫。

五郎太夫 五郎太夫はおりまして候は、どなたでござります。

太郎冠者 どなた、だかも、忘れまして。

五郎太夫 さてもさても、おい（老い）てこられたお人かな。

太郎冠者 それがしが、国元をたつときは、うじさまを、背中にしよい、よさり（夜）は、西へ西へといらせられました。

五郎太夫 おう、それは、東の国でご座りませう。東の国は、どなたでござります。

太郎冠者 どなただかも忘れまして。

五郎太夫 さても〜、老いてこられたお人かな。

太郎冠者 それがしが、頼まれたお人は、たしか、しいしいとやらでござります。

五郎太夫 おう、それは信濃の国で御座りませう。信濃の国は、どなたでござります。

太郎冠者 どなたかも、忘れまして。

五郎太夫 さても〜、老いてこられた御人かな。

太郎冠者 それがしが、頼まれた殿様は、たしか、左御まげとやらで御座ります。

五郎太夫 おう、それは、左折りのこととござりませう。それ左折り。召うつる御方は、源氏かたでは、牛若の君。平家方では、無官の太夫敦盛様、ほかに、召そうづる御方はござりませぬ。烏帽子にも、だん〜、おなかござります。それ天竺釈尊は、跋提河のほとりにて、涅槃の像をおたて給ふ。釈尊、さらに往生は、木の許に向つて涅槃の雲にかくれ給ふ。みよと一派は人ひよす。星と一派は日月しよする。それ星の功德、東国の大名の烏帽子には、宵の明星二ツ星。中国大名の烏帽子には、夜中の明星三ツ光、西国大名の烏帽子には、紫苑の雲に三日月さん。北国大名の烏帽子には、天の河原にたなば

た大星、奥州大名の烏帽子は、五色の雲に、あかつきの明星。かやうでござります。烏帽子は心得ました。折つて上げませう。宿にさがりて、休ませられ。

五郎太夫 エイ。

太郎冠者 はツ。

との 太郎冠者を都へ烏帽子折にやつたれど、いまにてかへらん。それにつき、治郎冠者をよび出し、太郎冠者を迎へにやろうかと存ずる。冠者おるか、次郎冠者。

太郎冠者 ^(マア) ほう。

との おるか。

次郎冠者 おん前に。

との たて。

次郎冠者 ほう。

との やい、きくか。

次郎冠者 ほう。

との なんじ、呼び出すは別儀ではない。太郎冠者を、都へ、烏帽子折にやつたれども、いまにて帰らん。なんじ都へ、太郎冠者を迎へに行つてまゐれ。

次郎冠者 ほう。

との 早う参つてあるな。

次郎冠者 ほう、まだ、お殿様の、おはもといも、おひじくり出んものが、早う参られませうか。

との ほう、それもす、急がせる為め、早う参れ、いい。

次郎冠者 さても〜、おらア御殿さまは、こわいお殿様でご座ります。いまの事、いまいと仰せられます。あんな殿様に三年も十六年も使はれたなら、顔の皮のたたき皮の鞆皮になるかもしれん。いや〜、なつたかしら、まだなりもせんなれ共、泣く児と地頭には勝れんものだ、と、ご座ります。いや〜、都をさして急ぎませう。きたり、急ぐに程なく、都に着きました。都は広うござります。まづはや、一条は今出川、二条堀川、三条大橋、四条室町、五条油の小路まで、のらり、のらりと、着きました。いやいや、たなもの見物致しませう。こちらには、結構な物を出しておかせられました。まづ、はやちちで作つた、いのこ、ごう目まじ〜と、さしておかせられました。こちらを見物致しませう。こちらには、印籠、提鞆まで出しておかせられました。あいつたしや、あいつたしいがぐりの枝折まで、出しておかせられました。いや〜、たな物見物ばかりしてはおられません。そろ〜、太郎冠者をたづねませう。こちらには太郎冠者はおられませんか。むこいおられません。もし、こちらには、太郎冠者はおられませんか、もしおられませんか、もし、さても〜このやうに、太郎冠者の、おられんことが、ござりませうか。

太郎冠者を呼ばつて見ませう。太郎冠者、太郎冠者、あそこに見ゆるは、太郎冠者そうに見える。ちつと、とがめてみませう。太郎冠者、太郎冠者。

太郎冠者 さう申すは次郎冠者で、ないか。

次郎冠者 お前の来ようが遅いとて、お殿様のお殿様が、むかつに申しこされました。

太郎冠者 ふん、おら御殿様のくせとして、物の毛に、火のついたごとく、ちり〜とお
仰せられます。

次郎冠者 まつ気になつて居られます。

太郎冠者 さても〜、それがしは、主のやかたを忘れました。

次郎冠者 ふん、主の館を忘れる。よしなゐものがあるものか、それがしが、行つてみて
来ませう、それかしも忘れました。

太郎冠者 それかしは、長の道中のことなれ共お前は、昨日や今日きて、はや忘れると
は。

次郎冠者 のウの、それがしが、国もとを立つときは、烏と雀の親子がおりました。

太郎冠者 あれは、親子ではありません。

次郎冠者 いい、親子でござります。烏は上にいて、子か子かと申します。雀は下にい
て、父、父と申します。あれは、親子でござります。

太郎冠者 のウの、それかしの殿様は、うきじての瓢箪、おがらに差し、川中島へ、ぐう
と、ほかいたるような、気の浮んだ、御人でござります。囃子もんにしていつたら、多
くは出られるで御座りませう。はやしてみませう。

(歌)

へしなのの国の住人 六と六と 烏帽子折りに出たれば 烏帽子折らんで 主のやかた
忘れた あれが 主の館か これ 主のやかたか 囃子ものにもしてみやう

(囃子)

いい、げにもそうやよ、げにもそうもな、まづは、きんぞくでかいた。さても、きん
ぞくでかいた、で、かいたりや、くわいた、まづ、きんぞくでかいた。

との まだもあらば聴きませう。

東国大名の烏帽子には、宵の明星二ツ星。いい、げにも、そうもなよ、げにも、そうも
な。まづ、きんぞくでかいた。さても、きんぞくで、かいたりや〜、まづは、きんぞ
くでかいた。

中国大名の烏帽子には、夜中の明星三ツ光。

西国大名の烏帽子には、紫苑の雲に三日月様。

北国大名の烏帽子には、天の河原にたなばた星。

奥州大名の烏帽子は、五色の雲に暁の明星。

以上中西北奥州、おの〜、東国の囃子を付ける事。

あの日を見さいな、山の端にかかつた、かかつた。山の端にかかつた、めん〜ざらり
んと、ふめば、ほろりんと、おつるとも、まりがえだにとまつた、とまつた〜、毬が
枝にとまつた、こつばいしよらば、おししのし〜

五百八十年めでたう候。

【比較・考察】

『柏崎市史資料集 民俗編』の詞章と現行の『新潟県民俗芸能誌』の詞章とでは、記述の前後や若干の語形の変化がみられるが、話の筋そのものに大きな影響を与えるほどのものではない。

前半にはほとんど違いはみられないが、後半になると多少違いがみられる。箇条書きにすると以下ようになる。

- ①『柏崎市史資料集 民俗編』では「アソコニ見エルハ 太郎くわじやでないか」となっているところが、『新潟県民俗芸能誌』では「太郎冠者、太郎冠者」となっている。
- ②『柏崎市史資料集 民俗編』の「まつたお前はおんととて」という表記が『新潟県民俗芸能誌』にはない。
- ③『柏崎市史資料集 民俗編』では「おとのさまがむかいにゆこされました まきになつて居り候」となっているところが、『新潟県民俗芸能誌』では「お殿様のお殿様が、むかつに申しこされました」となっている。
- ④『柏崎市史資料集 民俗編』の「それがしがいつて見て来ます」「あつコリヤコリヤ あれは羽根があつて立つとのでござります」という表記が『新潟県民俗芸能誌』にはない。
- ⑤『柏崎市史資料集 民俗編』の「もうたつたでござりませう」という表記が『新潟県民俗芸能誌』にはない。
- ⑥『柏崎市史資料集 民俗編』の「おそどの子供と」という表記が『新潟県民俗芸能誌』にはない。
- ⑦『柏崎市史資料集 民俗編』では「山の端にかかた いい かかたかかた 山のはにかかた いい かかたかかた 山の端にかかた 山のはにかかた」となっているが、『新潟県民俗芸能誌』では「山の端にかかた、かかた。山の端にかかた、」となっている。

これらの違いもまた、話の筋そのものに大きな影響を与えてはいないと思われる。

双方に大きな違いがみられない分、どちらにも目を通すことで、より一層話の流れをつかむことができると思う。

【注釈】

烏帽子一鳥の羽のように黒く塗った帽子。元服した男子が略装につける袋形のかぶりもの。奈良時代以来、結髪的一般化につれて広く庶民の間に用いられた。貴族の間では平常に用い、階級・年齢などによって形と塗り様とを異にした。もと羅や紗で作ったが、後世では紙で折り、漆で塗り固めた。立烏帽子・風折烏帽子・侍烏帽子・引立烏帽子・揉烏帽子などがある。

烏帽子折一鳥帽子をつくること。また、その職人。たなもの一水差しその他の道具を飾り置きたな。

金襴—金糸を絵緯として織り込み、それを主調として模様を表出した織物の総称。

緞子—紋織物の一種。生糸、また経緯異色の練糸を用いた縹子の表裏組織を用いて文様を織り出した絹織物。

綾にしき—綾と錦。美しい着物や紅葉の形容。

印籠—一般に扁平な長方形ないし五重の小箱から成る容器。

提鞆 = 見せ鞆—腰刀の鞆を納める染革または錦製の袋。

振りつづみ—①雅楽の打楽器の一つ。

②①に似せて作った玩具。でんでん太鼓。

③鈴太鼓の別称。

釈尊—釈迦牟尼の尊称。

涅槃像—釈尊入滅の姿を、絵図や彫刻として作ったもの。

以上、『広辞苑』等による

(森 尚子)

第2項 三条の小鍛冶

1、はじめに

狂言「三条の小鍛冶」は戦後まで下野・高原田の両地域に伝えられている。現在は下野が上演することが多い。まず現行として伝えられている「三条の小鍛冶」のあらすじを簡単に述べた後、現行の詞章と時代の異なる詞章とを比較・考察していく。(年代の古い順から「高原田明治本」、「新潟県民俗芸能誌」、現行である「出羽・本歌・入羽—綾子舞21世紀への伝承—」を資料A、B、Cとして後に載せる。)

また、最後に謡曲「小鍛冶」も載せておく。

2、あらすじ(現行をもとにしたもの)

○登場人物(資料によって変化)

藤原頼秀 宗近 宗近の妻 デキ 狐

内裏の官人である藤原頼秀が、三条小鍛冶宗近に天子の勅命を伝える。その内容は「天下が治まったが、三振りの太刀が無くてはかなわぬ。太刀を打てとの命令である」というもの。これに対し、宗近は無理であると断ろうとするが、頼秀は天子の諭言には背くわけにはいかないと、引き受けさせる。

そこで春日大明神の神力にすがろうと、一人参拝に出かける。すると宗近が留守の間に、稲荷の神体狐が玉鋼を持ってくる。そこに帰ってきた宗近は、この玉鋼を大明神の授かりものであると喜び、自分の妻と弟子のデキ、そして狐も手伝って三振りの太刀を打ちあげる。

○みどころ

太刀を打つ場面で宗近・宗近の妻・デキ・狐の四人が締め太鼓を代わる代わる連打し、ゆるやかな音から次第に急テンポになる場面。

3、詞章の比較・考察

【資料Cの両地域の比較】

まず下野・高原田の両地域の比較をする。よって現行である資料C「出羽・本歌・入羽（以下略）」は下野と高原田のどちらの詞章も存在するので、これを参考にする。

最初に頼秀自身の紹介であるが下野「藤原の頼秀」に対し、高原田「中納言の叙、頼秀」としている（※1）。頼秀による三振りの太刀が必要な理由が、下野では「四海長閑ならざらんにつき」高原田では「谷風おだやかならんにつき」という違いが。どちらも天下を平穏にするためであるが、言い方に若干違いが見られる（※2）。次に宗近が勅諭を断るときに、下野では私以外にも鍛冶はいるからと返事に消極的だが、高原田では何よりもまず妻に意見を求めている（※3）。また、下野では無条件に勅諭を受けているが、高原田では「藤原氏五位のくらいに進ぜ」という褒美が与えられている（※4）。そして刀の名は下野では宗近が決めているのに対して、高原田では頼秀が三本とも決め、宗近に命じている（※5）。宗近が春日神社に参詣に行く理由を下野では力不足だからとしているが、高原田では玉鋼（たまはがね）を得るために祈願に行くとしている違いがある（※6）。そして下野では春日について身体を清め、祈祷の場面が記されているのに対し、高原田では一切ない（※7）。その後、下野では狐が金玉を届けに現れ、デキとの一乱があるが、高原田では玉鋼を置いて行く場面が簡略で、狐の台詞はない（※8）。それから下野ではデキが、狐扮する人物との浮気をしたのではと旦那を責めるが、高原田では「下京の雄ごの子でも、つつ腹んだと思うて、こんがな腹しております。」とデキが、妻の浮気を疑い責めているように私は解釈した（※9）。刀を打つ場面では、下野は妻も一緒になって手伝うが、高原田は女は不浄であるとして、妻を仕事場へ入らせない（※10）。またここで高原田では二郎という人物がいることが「二郎、槌をだせ。」の台詞から示されるが、詳細は明らかにされていない。デキとは異なる人物か（※11）。最後に、刀の銘が両地域で異なる（※12）。

【資料A「高原田」と資料C「高原田」の比較】

次に高原田の地域で詞章が時代とともにどのように変化したかを知るため、現行（資料C）の高原田と、最も古い資料A「高原田明治本」を比較する。

資料A「雨のむらくも」と資料C「天の叢雲」、またA「御直状」とC「御勅諭」という風に漢字が異なる。しかし意味は同じと思われる（※13）。次に資料Cでは刀の名は頼秀が決めていたが、資料Aではむね（宗近）が決めている（※14）。次に資料Cでは「玉鋼（たまはがね）」とあったが、資料Aでは「かな玉」となっている。これは下野の言い方と同じである（※15）。そして資料Aの大きな特徴として、登場人物に狐が

出てこないことがあげられる。むねが春日へと旅立った後は、妻とデキの掛け合いとなるだけである（※8、16）。最後の刀を打つ場面での「わしもてつだいましょーか」というかかの問いにむねは答えていないため、高原田の特徴として女は不浄のものとして金床に入れないが、資料Aではその詳細がわからない（※17）。資料Aは台詞のみ記載しており、舞台上の動作・仕種が記されていないことから、その詳細がわからないが、※16で述べた狐が出てこないということも、実際に演目を見てみると、狐が金玉をそっと置いて去っていく場面があるとも予想される。

【資料B「下野」と資料C「下野」の比較】

高原田と同様に、下野でも時代とともに詞章の変化があったかを知るため、現行（資料C）の下野と、やや古い資料B「新潟県民俗芸能誌」を比較する。資料Bでは始めの頼秀の語りで「そもそも我国は、国常立の尊より政治始まり」とあるが、資料Cには見られない（※18）。また太刀を打つ前の清める儀式のやり方についてであるが、資料Aでは注連縄は「八重」に張るよう頼秀が命じているが、資料Cでは「七重」に張るよう命じている（※19）が、この回数の違いに何か意味はあるのかもしれないがわからなかった。そして宗近が春日で祈祷をする際、資料Cでは「氏子不憫とましまさば、まず一つの瑞祥を見せしめ給へ。」とあるのにたいして、資料Aではその台詞は無い（※20）。最後に刀の名前であるが、三本のうち一本だけ名が違う。資料A「鬚切丸」と資料C「ヒザ切り丸」（※21）。

4、刀の名称

資料A「高原田」——「あさきりまる」「ヒゲ切りまる」「友切りまる」

資料B「下野」——「小烏丸」「鬚切丸」「アザ切丸」

資料C「下野」——「小烏丸」「ヒザ切り丸」「アザ切り丸」

資料C「高原田」——「あざぎり丸」「ひげきり丸」「ともきり丸」

謡曲「小鍛冶」——「小狐丸」一本のみ。

なお、実習での綾子舞「三条の小鍛冶」では、下野が演じていたこともあり、「こがらす丸」、「ひざきり丸」、「あざきり丸」という名称が使われ、現行である資料C「下野」と同様であった。

5、謡曲「小鍛冶」

本来、狂言「三条小鍛冶」は謡曲の「小鍛冶」と同一系統であり、大まかなあらすじは同じであるが、相違点は主に四つある。

一つ目は登場人物に藤原頼秀が狂言では出てくるが、謡曲では藤原頼秀ではなく、橘の道成（実際に存在せず）が登場する点。そして二つ目は、宗近ではなく狐が主役である点。三つ目は、狂言では太刀を打つ場面では登場人物らが（高原田の場合、妻は参加しな

い) 締め太鼓を打つのだが、謡曲では締め太鼓ではなく、宗近の鍛冶場にしめ縄を張り金床(焼いた金属をたたいたりする台)を据える点。最後に、狂言では三本の刀を打たせるが(資料では「三振り」「三口の太刀」と表現)、謡曲では「み剣」と表し一本だけ打たせる。謡曲の刀の名は先にも述べてあるが「小狐丸」という。

○登場人物

前ジテ	童子(化身)
後ジテ	狐(稻荷の明神の使)
ワキ	小鍛冶宗近
ワキ連	勅使・橘の道成
アイ	末社の神(又は宗近の下人)

〈語句説明〉

宗近—平安中期の山城の刀工。京都三条に住んでいて、三条小鍛冶と称する。その系統の作風を京物という。

春日大明神—春日権現。奈良市にある春日神社の祭神。藤原氏の氏神。興福寺の鎮守。

綸言—天子のいうこと。みことのり。「綸言汗の如し」とは、「一度口に出した君主の言は、汗が再び体内に戻らないのと同じで、取り消すことができない。」の意味。

注連縄(しめなわ)—神前、神事の場に不浄なものの侵入を禁ずるしるしとして張る縄。

塩垢離(しおごり)—潮水を浴びて身を清めること。穢れを払う儀式。

瑞祥(ずいしょう)—めでたいしるし。前兆。

御利生(ごりしょう)—神仏から受ける恩恵。ごりやく。

(中納言の)叙—官位をさずけること。

振り—刀剣を数えるのに用いる語。

屋戸—宿と同じ。

子細—事のくわしい事情。

下京(しもぎょう)—京都の二条通以南の称。中小の商人が住んだ。

四海—天下。

長閑(のどか)—のんびりと、おちついて穏やかなさま。

荒ごも—荒く編んだこもむしろ(マコモの葉で作ったむしろ)。祭礼神事に用いる。

潔斎—神事などの前に、酒や肉食をつつしみ、沐浴をするなどして心身を清める。ものいみ。

別火—神事を行う者が、穢れに触れないように別に切り出した火で食物を調理して食すること。また、穢れのある人が炊事の火を別にすること。

かねのを（鐘の緒）—神社にある鈴や鰐口（わにぐち）などにつけてある綱、または布。家の神棚にも用いる。

玉鋼（たまはがね）—日本刀の製作に用いる、砂鉄を溶かした鋼。

天の叢雲（あまのむらくも）—日本神話でスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治したとき、その尾から出たという剣。

小烏（こがらす）丸—小烏造（奈良末期から平安初期に流行した造りの様式。）の太刀。平家重代の名剣。

鬚切（ひげきり）丸—源満仲の愛刀。罪人の首を斬らせたとき、首とともにあご鬚をも切ったという。鬼切り丸ともいう。膝丸とともに源家重代の宝剣とされる。

膝丸—源満仲の愛刀。罪人の首とともに膝まで切り落としたという。のち蜘蛛切丸と称。（これがヒザ切り丸か。）

資料A『柏崎市史資料集民俗編』所収、高原田明治本

三条の小かじ

- より 「これは代理の宮人 中納言のじよー頼秀でござります こんど谷風おだやかならんにつき みふりのたちの一てかなはんぎ有り 雨のむらくも※13のほーけんと同じゆーして 三じゆーのこかじむねちがニ打たせとのごりんげんでござります いやいや 三条をさしていそぎましょー」
- 来り いそぐにほど無く三条へ着きました むねちかにあんないを乞へましょー
「ヲー むねちかは おやとに候か むねちか」
- むね 「ほー むねちかと御尋ねなされ候は 如何人の御用にて候か」
- 官人 「ヲー これは代理の宮人中納言のじよー頼秀でござります こんど谷風おだやかならんニ付き みふりのたちの一てかなわん儀有り 雨のむらくもの宝刀と同じゆーして そなたに打たせとの御直状※13で御座ります」
- むね 「をー それなら屋戸へ下りて 女共とそーだん致しましょー」
- 妻 「出やれかし」
- 妻 「ほー 何か御要で御座ります」
- むね 「ほ 頼秀様の御出で有るわい」
- 妻 「ほー まった よりヒでさまニハ 此の所へ何として御要にて候か」
- むね 「こんど谷風おたやかならんニ付 みふりのたちの一てかなわん儀有り 雨のむらくもの宝刀と同じゆーして そなたに打たせーとの御直状であるわい」
- むね 「御受申す事は出来まいな」
- 妻 「受け申しましたらよろしよーござりましょー」
- むね 「コノ女 でばじゃれた女だ」
- 妻 「ほ 御受け申しましたら末がめでたうござりましょー」
- むね 「ほー かかそーだの」
「なんとおーせつけられても御受け申す事はなりません」

- 官人 「此れさりん言はあせの如し いぎ有りません」
- むね 「ほ それなら御受け申しませよー」
- 頼 「をー 御受申すや 藤原氏五位のくらいにしんずうる」
- むね 「それなら受け申しませよー」
- むね※14 「それたちを打つならば 四方にしめを張り けっさい べっくわをあらため
ずい分清めて打ちませまつた 目を切るならば 一刀はあざきり 円と切るべ
し まつて 一刀はヒげきりまると切るべし まつて 一刀は友切りまるときる
べし ずい分きよめて うちませ」「イー」「ハ」
- むね 「さてもさても 御受け申しわ申しましたが 刀を打つかな玉※15をもちません
某れがしが氏神様は 春日大明神で御座なさる 此に参り 神にきせを取りま
しよー」
- 妻 「できたや できたや できたや だんなのるすだ すりときせ」
- でき 「ふん おら かさんのよーなこんじーよい すりとき事こくりとぎののすって
〜 〜 すりこぎる」※16
- 妻 「できやできや 主人のかいらしたっても何んにも言な」
- でき 「言ふて 言ふて 言へこくります」
- 主人 「これこそりょー願かの一たり」
- でき 「りゆーがんかのーた はんでい出し」
- 主人 「やいできしさい有りそーな」
- でき 「しさい有るいさし」
- 主人 「しさい有らはよい」
- でき 「言たら御前のはじになりませよー」
- 主人 「はじになって大じ無い」
- 妻 「できキ ーや有られん事言な」
- でき 「言て 言て 言て 言へこくります」
「しもぎょーのおじごの子でも つっはらんだと思て こんがなはらして居りま
す」
- 妻 「できや できや できや 有られん事を言なや」
- でき 「てっほ すっほ 出すぞよ」
- むね 「これこそ春日様のおさづけの金玉しやい でき 此れを見ろ」
- でき 「をー」
- むね 「やい でき 刀ち打つ金床をたおせ」
- でき 「ほー」
- かか 「わしもてつだいましよーか」※17
- むね 「じろーづち出せ」
- むね 「ハイや うちまへせ」
- むね 「刀も目度 打ちました さらは 目をきりませよー

まつて 一刀はあさきりまると切りましょー
 まつた 一刀ヒゲ切りまると切りましょー
 まつて 一刀友切りまると切りましょー

資料B『新潟県民俗芸能誌』

小鍛冶（下野）

登場人物—5人 頼秀、宗近、宗近の妻、デキ、狐

頼秀 是は、内裏の官人藤原の頼秀でございます。そもそも我国は、国常立の尊より政治始まり※18、四海長閑に治まる。今度、四海のどかならざらんにつ、三口の太刀、なうてかなわん儀あって、三条の小鍛冶宗近に打てとの御勅諭、いやいや、三条指して急ぎませう。こわしたり、急ぐ程なく、三条に着きました。宗近は御宿に候か、宗近。

宗近 ほう、宗近とお尋ねなされ候は、如何なる人の御入来にて候。

頼秀 おう、苦しゅうもない。藤原の頼秀であるわい。

宗近 頼秀様には、まった、何んとしての御入来にて候。

頼秀 されば其のこと、そもそも我国は、国常立の尊より政治始まり、四海長閑に治まる。今度、内裏様より、四海のどかならざらんにつ、三口太刀、なうてかなわん儀あって、小鍛冶、そなたに打てとの御勅諭。

宗近 ほう、三条には、大鍛冶、小鍛冶、銀鍛冶多ござります。何方なりとも、お仰せつけられて下され。

頼秀 これさ、そなたに打てとの御勅諭。

宗近 ほう、其儀にもござりませうものならば、宿へ下り、女房と相談致しませう。

頼秀 おう、それよかろう。

宗近 嬢、嬢、頼秀様の御出ぢやわい。

妻 頼秀様には御苦労様でございます。

頼秀 そなた鍛冶の女房かな。

妻 ほう、頼秀様には、まつた、何として御入来でございます。

宗近 ほう、今度四海長閑ならざらんにつ、三口の太刀なうて、かなわん儀あって、某に打てとの御勅諭なれども、御受け申すことは出来まいのう。

妻 ほう、それは御受け申されたが宜しゅうござりませう。

宗近 そりやまた何是。

妻 末には、芽出度い事もあるものでござります。

宗近 さてさて、此女は出場じやれた女。ほう、何とあつても、御受け申されません。

頼秀 是さ、繪言は汗の如し、一度出ては二度と帰らず、御受け申しやれや。

宗近 ほう、其儀にもござりませうものならば、御受け申しませう。

頼秀 御受け申さうや。

宗近 ほう。

- 頼秀 それ太刀を打つならば、八重に注連縄を張り※19、地には荒ごもを敷き、潔斎別火を改め、天の瑞雲の劔と同じうして、ずい分大切に打ちませい。
- 宗近 ほっ、有り難うござります。
- 頼秀 身は居宅へ帰る。
- 宗近・妻 御苦労様でござりました。
- 宗近 御受け申して来たわいのう。
- 妻 御芽出度うござりました。
- 宗近 我等、自力には叶ふまじ。わが氏神様は、春日大明神様でござります。春日様へ参詣に行つてこうわい。
- 妻 それが宜しうござります。
- 宗近 イヤイヤ、春日様を指して急ぎませう。をわしたり、急ぐに程なく、春日様に着きました。垢離をとりませう。イーブ、ザーブ、ザーブ、是は是は清らか水。かねのをを採りませう。そもそも我国は、国常立の尊より政治始まり、天津こやねの尊まで、四海長閑に治まる。長閑なるを以て春の日、春日大明神と仰ぎ奉る。今度、四海長閑ならざらんにつき、三口太刀なうて、かなわん儀あつて、某に打つてと御勅諭、我等自力には叶ふまじ、あわれ明神様の神力合せてたび給ひ。チャグワ、ラグワ、いやいや通夜申しませう。
- 妻 デキやデキ、旦那の留守だとして、休んで居れまい、磨り砥ぎでもしやれや。
- デキ ふん、おら主婦さんの様な、旦那の留守だから、休めとこそ云ひそうなもの、磨り砥ぎのと、すつてすつて磨りこくれ。
- 狐 頼みませう頼みませう。
- デキ 頼みませう頼みませうと、どこの子ぢやや、昨日も来て、戸をたたく。また来て戸をたたく。今日は、磨り砥ぎぢや。帰れ、帰れ。
- 狐 旦那に用あつて、参りました。
- デキ 旦那は留守ぢや、帰れ、帰れ。
- 狐 それなら、ここもとに、産を致しませう。
- デキ 産をするや、それはまた。旦那の思ひ女でもあるかいな。
- 狐 ほっ、その様なものでござります。
- デキ 主婦さん主婦さん、旦那の思ひ女ぢやとて、こんなものが来て居ります。
- 妻 デキやデキ。あだけない事云はないもの、芽出度い、床でも取つて休ませろ。
- デキ ふん。おら主婦さんは、心のよい、おれさい腹が立つてせうがない。さつさ入つて休みなされ。
- 狐 こん、こん、こん。
- 宗近 嬢、今帰つたわい。
- 妻 お帰りなされませ。何と御利生ありましたかいのう。
- 宗近 おう、御利生あつたにも何も、某若き時より、人の妻子の褌袖も引かぬ。それ故、御利生あつたわいのう。

デキ 語れ語れ。
 宗近 やい、デキ、仔細ありさうなことを云う。
 デキ 仔細こそござります。
 宗近 仔細あるなら、是へ出せ。
 デキ 出しては、御前様の恥になりませう。
 宗近 恥になっても大事な。是へ出せ。
 デキ 主婦さん主婦さん、出ませうか。
 妻 デキやデキ、あらけない事云わないもの。
 デキ テンポー、スッポ、ほうり出すぞ。
 狐 こん、こん、こん。
 宗近 あア、是こそは、春日大明神様、御授けの金の玉。やエ、デキ、是を見よ。
 デキ ほう、ホーオ。
 宗近 いざや、太刀を打ち始めませう。嬬も打ちやれ、デキも打て、やエ、デキ金床直せ。
 デキ ほう。

(是より太刀を打つ舞、宗近、妻、デキ、狐の四人にて)

宗近 芽出度う、太刀を打ち終わりました。銘を切りませう。いやいや、結構に出来ました。これ一口は小烏丸と切りませう。同じく結構に出来ました。これ一口は鬚切丸※21と切りませう。同じく結構に出来ました。これ一口はアザ切丸と切りませう。芽出度う銘も切り終わりました。和歌をあげて、宿へ帰りませう。

(唄)

へ芽出度や芽出度やのう

三口の太刀のあらん程

天下太平 御国安穩と

治まる御代こそ芽出度かりけれ

宗近 五百八十年。

妻・デキ 芽出度う候。

資料D『日本古典文学大系41 謡曲集下』岩波書店刊行

小鍛冶

1. [名ノリ]

ワキ連 これは一条の院に仕え奉る、橘の道成とはわがことなり、さても帝今夜奇特のご
 靈夢ましまして、三条の小鍛冶宗近に、み剣を打たせられるべきとの宣旨只今成
 り下りて候ふほどに、このよしを宗近に申し付けばやと存じ候

2. [問答]

ワキ連 いかにかこの内に宗近があるか

ワキ たれにてわたり候ふぞ

ワキ連 これは宣旨にて候、わが君今夜不思議のご霊夢ましまして、み剣を打たせらるべきとおんことなり、疾う疾う仕り候へ

ワキ 宣旨畏つて承り候、折節相槌打つべき者のなく候ふをば、なにと仕り候ふべき

ワキ連 不思議のことを申すものかな、その名を得たる汝なるが、相槌打つべき者のなきとは、心得がたき言ひごとな

ワキ これは仰せにて候へども、かやうの一大事の物を仕るには、われに劣らぬほどの者の相槌仕りてこそ、み剣も打ち申すべけれ、とにかくにおん返事を申しかね、赤面したるばかりなり

ワキ連 申すところはさることなれども、帝も奇特のご霊夢ましまして、頼もしく思ひつ、早々領承申すべしと、重ねて宣旨ありければ

[上ゲ哥]

ワキ この上は、とにもかくにも宗近が、

地 とにもかくにも宗近が、進退ここに極まりて、み剣の刃の、乱るる心なりけり。さりながらご政道、直なる今の御代なれば、もしも奇特のありやせん、そののみ頼む心かな、そののみ頼む心かな。

3.[□]

ワキ 言語道断、一大事を仰せ出だされて候ふものかな、かやうのおんことは神力を頼み申すならでは別儀なく候、それがしが氏の神は稲荷の明神なれば、これよりすぐに稲荷に参り、このことを祈誓申さばやと存じ候

4.[問答]

シテ のうのうあれなるは三条の小鍛冶宗近にてわたり候ふか

ワキ 不思議やななべてならざるおんことの、わが名をさして宣ふは、いかなる人にてましますぞ

シテ 雲の上なる君よりも、剣を打ちて参らせよと、汝に仰せありしよのう

ワキ さればこそそれにつけてもなほなほ不思議のおんことかな、剣の勅も只今なるを、早くも知ろしめさるること、返すがへすも不審なり

シテ げにげにそれはさることなれども、われのみ知れば諸人も、

ワキ 天に聲あり

シテ 地に響く

[上ゲ哥]

地 壁に耳、岩の物言ふ世の中に、岩の物言ふ世の中に、隠れはあらじ殊になほ、雲の上人のみ剣の、光はなにか暗からん。ただ頼めこの君の、恵みによらばみ剣も、などか心にかなはざる、などかはかなはざるべき。

5.

[クリ]

地 それ漢王三尺のげいの剣、居ながら四夷の乱れを静め、また煬帝がげいの剣、周室の光を奪へり。

[サシ]

シテ そののち玄宗皇帝の鍾馗大臣も、
 地 剣の徳に魂魄は、君邊に仕へ奉り、魍魎鬼神に至るまで、剣の刃の光に恐れて、
 その仇をなすことを得ず、
 シテ 漢家本朝において剣の威徳、
 地 申すに及ばぬ奇特とかや。

[クセ]

地 またわが朝のその始め、人皇十二代、景行天皇、みことのりのおん名をば、日本
 武と申ししが、東夷を退治の勅を受け、関の東も遙かなる、東の旅の道すがら、
 伊勢や尾張の、海面に立つ波までも、帰ることよと羨み、いつかわれらも帰る波
 の、衣手にあらますと、思ひ続けて行くほどに。
 シテ ここやかしこの戦ひに、
 地 人馬うんくつに身を砕き、血は涿鹿の川となつて、紅波楯流し、数度に及べる夷
 も、兜を脱いで矛を伏せ、皆降参を申しけり、尊の御宇より、み狩り場を進め給
 へり。

[□]

地 頃は神無月、二十日のあまりのことなれば、四方のもみぢも冬枯れの、遠山に見
 ゆる初雪を、眺めさせ給へしに。
 シテ 夷四方を圍みつつ、
 地 枯れ野の草に火を掛け、餘炎頻りに燃え来り、敵攻め鼓を打ちかけて、火炎を放
 ちて掛かりければ。
 シテ 尊剣を抜いて、
 地 尊剣を抜いて、あたりを払ひたちまちに、炎も立ち退けと、四方の草を薙ぎ払へ
 ば、剣の精霊嵐となつて、炎も草も吹き返されて、天に輝き地に満ち満ちて、猛
 火はかへつて敵を焼けば、数万騎の夷どもは、たちまちここにて失わせてんげ
 り。そののち四海治まりて、人家戸ざしを忘れしも、その草薙のゆゑとかや、只
 今汝が打つべき、その瑞相のみ剣も、いかでそれには劣るべき、傳ふる家の宗近
 よ、心安くも、思ひて下向し給へ。

6.[問答]

ワキ 漢家本朝において剣の威徳、時にとつての祝言申す計りなく候、さてさておん身
 はいかなる人ぞ
 シテ よしたれとても頼むべし、まづまづ勅のみ剣を、打つべき壇を飾りつつ、その時
 われを待ち給はば

[上ゲ哥]

地 通力の身を変じ、通力の身を変じて、必ずその時節に、参り會ひておん力を、付
 け申すべし待ち給へと、夕雲の稻荷山、行くへも知らず失せにけり、行くへも知
 らず失せにけり。〔来序〕

7.[シヤベリ]

8.[□]

ワキ 宗近勅に従つて、すなわち壇に上がり、不浄を隔つる七重の注連、四方に本尊を掛け奉り、幣帛を捧げ

[ノット]

ワキ 仰ぎ願はくは、人皇六十六代、一条の院の御宇に、その職の誉まれを蒙ること、これ私の力にあらず、伊弉諾伊弉冊の尊、天の浮き橋を踏み渡り、豊葦原を探り給ひしみ矛より生まれり、その後南贍僧伽陀國波斯、弥陀尊者よりこのかた、天國ふじとの子孫に傳へて今に至れり

[ノリ地]

ワキ 願はくは、

地 願はくは、宗近私の、高名にあらず、普天率土の、勅命によれり、さあらば十方、恒沙の諸神、只今の宗近に、力を合はせて、賜ひ給へるとて、幣帛を捧げつ、天に仰ぎ、頭を傾け、骨髓の丹誠、聞き入れ納受、せしめ給へや

[□]

ワキ 謹上再拜。

9.[早笛] [ノリ地]

地 いかによ宗近、勅の剣、いかによ宗近、勅の剣、打つべき時節は、虚空に知れり、頼めや頼め、ただ頼め。〔舞働〕

[ノリ地]

シテ 童男壇の、上に上がり、

地 童男壇の、上に上がつて、宗近に三拜の、膝を屈し、さてみ剣の、鉄はと問へば、宗近も恐悦の、心を先として、鉄取り出だし、教への槌を、はったと打てば、

シテ ちょうど打つ、

地 ちょうちょうど、打ち重ねたる、槌の響き、天地に聞こえて、夥しや。

10.[掛ヶ合]

ワキ かくてみ剣を打ち奉り、表に小鍛冶宗近と打つ

シテ 神体時の弟子なれば、小狐と裏に鮮やかに

[中ノリ地]

地 打ちたて申すみ剣の、刃は雲を乱したれば、天の叢雲ともこれなれや。

シテ 天下第一の、

地 天下第一の、二つ銘のみ剣にて、四海を治め給へば、五穀成就もこの時なれや、すなはち汝が氏の神、稻荷の明神小狐丸を、勅使に捧げ申し、これまでなりと言ひ捨てて、また叢雲に飛び乗り、また叢雲に、飛び乗りて東山、稻荷の峰にぞ帰りける。

(吉崎彩子)

第3項 海老すくい

イ：高原田明治本、ロ：『新潟県民俗芸能誌』、現行のものとしてハ：『出羽・本歌・入羽 - 綾子舞、21世紀への伝承 - 』（a下野、b高原田）とする。

【あらすじ】

登場人物……殿（主）・冠者

殿様が明日の来客のご馳走のために鎌倉海老を買ってくるよう冠者に命じた。冠者はそれに従い、代物（銭）を請求したが下のことに通じない殿様は「銭はない、汝、計らえ」とお金も渡さず海老を買いに行かせようとした。これに腹を立てた冠者が殿様を騙してやろうと一計を案じた。

【詞章】

イ：高原田明治本 「えびすくい」

殿様「ゆみや八万大名、みよ一日は 客来を求むる事 何んにも事ヲかかんが、かまくらえびにはつたと事をかイテアル

此に付きくゆ者ヲ呼び出シ かまくらへ えび買へにやローかとぞんずる

「クワジヤ居るか、ヤイ クワジヤ」

クワ「ポー おんまいに」

主「立て」 ヤイキクか

クワ「ポー」

主「なんじを呼び出ダすわべつぎでナシ」

「明日は 客来を求むる事」何んにも事をかかんが かまくらえびにはつたと事をかイテアル」「なんじかまくらに上り えび買ふてまいれ」

くわ「ぼー」 かまくらえびニ御事を御かきなされました？

主「ラー なかなか

くわ「またせられずば ぎざりますまい」

主「イー」

クワ「はー」「はっと申しましたが 大物を渡させられ」

主「ラー 大物は大物として置かせられまいか」

く「ポー ポー 殿様の大物とは銭の事で御ざります。」

殿「ほー ぜニナイ なんじはからうーてまいれ

く「くワ者ニはからへとおしされか」

殿「ヨー なかなか」

主「イー」

く「ハ」「さてもさても 某か殿様は フーとしわいおよ様でござります」

「銭もあつけないで えび買で来 なぞとおせられます」「あんな殿様を一寸だましてみましょー」「申し との様」「只今 との様ノ御座しきにて えびすくよーをぞんじて

まいりました」

主「其れ何」

く「一寸とはやしのイ事でござります」

ウタ「ハー えびすくいか まだ どころほどこそもなこと」言でおはやしなされば
出る事でござります」

主「そ一言フてはやせば えびが出る事かな」

く「ほー〜 出るも出るも いらよーしだいで出る事でござります」

主「それはやしてみよーわい」

ウタ「は えびすくえが……………」

く「ほんじくワンジヤローキヨーノ者で候へしが えびをすくーてもて廻り候へしか」

「殿ぐ」「は えびすくいが 又 どころほどこそもな」

く「さいく上者 かまくら下りのやすが橋の下ニこそ えびがぱっとたまた」

殿ぐ「はー えびすイガ 又 ……………」

く「すかほやと思て さしのぞいて 見たりば あいニおごえか さんさんら見えて下っ
た」

二人「はー えびすくい……………」

く「すこそと思ふて 上りさまにすいてツて、おつとりなおして 下り様ニすい来た」

「ほ えびすくい……………」なニやら足ニさはった 又此ニさはた

「は えび…」 そーじ このごろ 北ノえびとてめす人は無キ者」

「ほ えび……………」「こえか、ふなか、すじきか、大の又なまずなら大手ひろいて じ
んじどおさいよ

「はー えびすくイガ——」

口：『新潟県民俗芸能誌』「海老すくい」

殿 是は侍、明日は客来を求むること、何にも事を欠かんが、鎌倉海老にハツタと事を欠
いてある。是につき、冠者を呼び出し、鎌倉へ海老買ひにやろうかとも存ずる。冠者居
るか、ヤイ冠者。

冠者 ほう、御前に。

殿 汝呼び出すは、余の儀でない。明日は客来を求むること、何にも事を欠かんが、鎌倉
海老にハツタと事を欠いてある。これにつき、汝鎌倉に下り、海老買うて参れ。

冠者 ほう。

殿 イエツ。

冠者 ハツと申しましたが、殿様代物をつかわせられ。

殿 代物は代物にしておきやるまいか。

冠者 代物とは殿様、銭のことでござります。

殿 銭はない。汝計らうて参れ。

冠者 ほう。

殿 イエツ。

冠者 ハツ。

おらが殿様はズツと汚い殿様でござられました。こんな殿様、一ツだましてみませう。

冠者 もうし殿様、冠者奴は、殿様のお座敷で、海老すくいを存じて参りました。

殿 アノ海老すくいを存じてあるな。

冠者 ほう、これにはチットはやしのいることでござります。

殿 ほう、これはまた、何んといふてはやせば、海老が出ることでござります。

冠者 ほう、「海老すくひ川、まだどこら程にそうもな」と云ふてはやせば、海老が入用う次第に出ることでござります。

(歌)

へ海老すくひ川 またどこら程にそうもな

- 1 ほんじ冠者ら、京の者で候へしが、加茂や桂川、海老をすくうて、うつて廻り候へしが、そうじ此頃、北の海老とて召す人なきもの。
- 2 さいく長者、鎌倉下りの安が橋（ハツ橋？）の下にこそ、海老がたんとなまつて。
- 3 漉こばやと思うて、差しのぞいて見たれば、鮎と鯉が、ざんざらめて下つた。
- 4 水を分けそ、そろりそろりかかれば、何やら足にさはつた。
- 5 また、此方にさはつた。
- 6 漉いてそうや、すいてそ、よりさまに漉いてこそ、網が破れそ、おつ取り直して、下りさまに漉いてそ。
- 7 オウ、そりやすした。鯉か鮎か、すずきか、大のまた鯰なら、大手をひろいでリンリと押へた。
- 8 そうじ此頃、網の手がゆれて、魚がおちて、パツパと散りて、何にもたまらん。
- 9 海老すくひ川、まだどこら程にそうもな。

冠者 小鮎まじりの小雑魚七八升。

殿 ソレツ。

汝、海老こそ漉けと申したに、小鮎まじりの小雑魚、なんにする。何にもない。サツと休め、

冠者 ほう、

殿 イエツ。

冠者 ハツ。

ハ：『出羽・本歌・入羽－綾子舞、21世紀への伝承』 a下野 「海老すくひ」

殿 是は侍、明日は客来を求ること、何にも事を欠かんが、鎌倉海老にハツタと事を欠いてある。是につき、冠者を呼び出し、鎌倉へ海老買ひにやろうかと存ずる。冠者居るか、冠者。ヤイ冠者。

冠者 ホー。

殿 居るか。

冠者 御前に。

殿 ヤイ 聞くか。

冠者 ホー。

殿 汝呼び出すも余の儀でない。明日は客来を求むること何にも事を欠かんが、鎌倉海老にハッタと事を欠いてある。

冠者 申し、殿様には鎌倉海老にハッタと事をお欠きなされましたか。

殿 おーなかなか。

冠者 ホー。

殿 是につき汝これより鎌倉へ下り、海老買うて参れ。

冠者 ホー。

殿 イエッ。

冠者 ハッ、とは申しましたが殿様、代物をつかわさせられ。

殿 代物

冠者 ホー。

殿 代物は代物にして置きゃるまいか。

冠者 代物とは殿様、銭のことでござります。

殿 銭

冠者 ホー。

殿 無い。汝計らうて参れ。

冠者 冠者奴に計らへと仰せられまするか。

殿 オーなかなか。

冠者 ホー。

殿 イエッ。

冠者 ハッ。

冠者 俺ら殿様はずーと汚い殿様でござらせられます。銭もあずけいで海老買うて参れ等と仰せられます。こんな殿様、一つだましてみませう。

冠者 申し殿様。

殿 何と。

冠者 冠者奴は殿様のお座敷で海老すくいを存じて参りました。

殿 アノー海老すくいを存じてあるな。

冠者 ホー。

殿 それ何と。

冠者 ホー、是にはチトはやしのいることでござります。

殿 ほう、それは又何と言ふてはやせば海老が出ることであるな。

冠者 ホー「ハ海老すくひ川またどこら程にそうもな。」と言ふてはやせば、海老が入用次第に出ることでござります。

殿 おー、それならはやしてみようわい。

「ハ海老すくい川また、どこら程にそうもな。」

(歌) へエー アアほんじ冠者ら イヤ京の者で候へしが、加茂や桂川、海老をすくう
て、売って廻り候らへしが、そうじ此頃、エー北の海老とて召す人なきもの

(囃) ハ海老すくひ川またどこら程に候もな

(以下、囃は繰り返す)

へさくい長者、エー鎌倉下りの安が橋の下にこいて、海老がたんとたまった
へハ漉こばやと思ふて イヤ 差してのぞいて見たれば エー 鮎とうぐいがざんざ
ららめいて下った
へ水を分けそ イヤ そろりそろり かかれば何やら足にさわった
ハ またこっちにさわった
へ漉いてそうやすいてそ上りさまに漉いてそ エー 網が破れそ おっとりなほし
て、下りさまに漉いてそ
へおんそりやすした。鯉か鮎か、すずきか、大のまた鯰なら大手を抜げてリンリンと
押さえた
へエー そうじ此の頃、網の手がゆれて エー 魚が落ちて ハア パツパと散りて
イヤ何にもたまらん
ハ 海老すくひ川また何処ら程にそうもな。

冠者 申し殿様。

殿 何と。

冠者 小鮎まじりの小雑魚七、八升。

殿 ソレツ。

冠者 ホー。

殿 汝、海老こそすけと申したに 小鮎まじりの小雑魚何にする。

冠者 ホー。

殿 何にもない サット休め。

冠者 ホー。

殿 エイツ。

冠者 ハツ。

ハ：『出羽・本歌・入羽－綾子舞、21世紀への伝承』 b高原田 「海老すくい」

殿 弓矢八幡大明、明日は客来を求むること何にも事を欠かんが、鎌倉海老にハツタと事を欠いてある。それにつき、冠者を呼び出し、鎌倉にえび買いにやろうかと存ずる。「冠者おるか、やい冠者。」

冠者 ほう。

殿 おるか。

冠者 ほう、御前に。

殿 やい聞くか。

冠者 ほう。

殿 汝呼び出したるは別儀ではなし。明日は客来を求むること何にも事を欠かんが、鎌倉えびにハッタと事を欠いてある。

冠者 鎌倉えびに御事をお欠きなされましたか。

殿 ほう、なかなか。それにつき汝鎌倉へ下り、海老買うて参れ。

冠者 ほう。

殿 早よう参ってあるな。イーッ。

冠者 「ハッ」、とは申しましたが、代物渡させられ。

殿 ほう、代物は代物にして置きゃれまいか。

冠者 ほう、お殿様、代物とは銭のことをござります。

殿 「銭」、無い。汝計らうて参れ。

冠者 ほう、冠者にはかろうてと、おうせられましたか。

殿 ほう、なかなか。

冠者 さてもさても、おらがお殿様はずっとしわいお殿様をござります。銭もあずけないで、海老を買うて参れなどとおおせられます。こんなお殿様一つだましてみませう。

冠者 もうしお殿様。

殿 何と。

冠者 ほう、只今お殿様にて海老すくいを存じて参りました。

殿 ほう、それ何に。

冠者 ちと囃子の要ることをござります。

ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな、と言うてはやせば海老がでることをござります。

殿 ほう、そう言うてはやせば海老が出ることかいな。

冠者 ほう、出るも出るもいりょう次第出ることをござります。

殿 ほう、それでははやしてみようわい。

囃子 「ハッ海老すくいがわまたどっころほどにそうもない。」

ほんじゆくわんじゆる京のもんで候らいしが、えびをすくってもって廻り候らへし。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

さいく長者、鎌倉下りの安が橋の下にこそえびがたんとたまった。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

すこばやと思うて、差してのぞいて見たれば、あいにごいがざんざらめて下った。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

すこぞとおもうて、登りざまにすいてって、おっとりなおして下りさまにすいてった。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

何やら足にさわった。また、こっちにさわった。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

そうじこのがろ北のえびとてめす人もなきもの。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

鯉か鮒かすずきか、大のまたなまずなら大手拵げてじんじとおさえよ。

「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな。」

冠者 もうし、お殿様。

殿 何と。

冠者 小ぶなまじりのぬかえび七、八升。

殿 鎌倉海老を買って参れと申したに 小ぶなまじりのぬかえび、何とする。

殿 何にもない。さっと休め、イツ。

冠者 ハッ。

【詞章の比較と考察】

○現行のハの a 下野と b 高原田との比較・考察

話の筋は a 下野も b 高原田もほとんど同じであるが台詞には違う部分も少くない。

始まりの言葉は a 「是は侍」、b 「弓矢八幡大明」となっているが弓矢八幡とは武士が誓いをたてる時に言う言葉なので意味は同じであると考えられる。a の「ずーと汚い殿様でござらせられます」に対応する部分が b では「ずっとしわいお殿様でござります」となっている。しわい=客いでケチという意味になるのでこれも同じような意味になる。そのすぐ後に a 「冠者奴は殿様の御座敷で海老すくいを存じて参りました」とあるが、b には「只今お殿様にて海老すくいを存じて参りました」とあるだけでお座敷という言葉はでてこない。しかしこれでは意味が通じないので元々はお座敷となっていた言葉が字の写し間違いか何かでお殿様に変化してしまったのではないかと思う。

一番違いが多く見られるのが雛子の部分である。a の「ハ海老すくひ川またどっころ程にそうもな」は b では「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな」となっている。また a では「どっころ程に候もな」と書かれている場所もあるので、a、b どちらともこの「どっころ程に候もな」が元の形なのではないだろうか。b では「ハッえびすくいがわまたどっころほどにそうもな」が何度も繰り返されているが、このような繰り返しは a には見られない。書かれている内容は大体同じであるが台詞の順序がばらばらであったり、a 「さくい長者、エー 鎌倉下りの安が橋の下にこいて、」 b 「さくい長者、鎌倉下りの安が端の下にこそ」と、どちらからも意味が分からない所がみられたり、a が「小鮒まじりの小雑魚」であるのに対して b では「小ぶなまじりのぬかえび」と違う表現がされている部分もある。

○イとロとハの比較・考察

比較してみると四つとも内容の違いがあるようには感じられず、違いは台詞が前後したり使われている単語が少し異なる程度である。

イの始まりは「ゆみや八万大名」となっているがこれはハの b と同じ弓矢八幡大明のこ

とだと考えられる。ハとロでは「汝鎌倉へ下り」となっている部分がイのみ「なんじかまくらに上り」となっていて、意味が全く違ってくる。またイで「大物」書かれているものが他の口、ハでは「代物」と書かれており、これは“おも”の音から漢字を当てたため違う字が使われたのだと思う。ハの a、b の比較でもみたがいでは「只今 との様ノ御座しきにて」となっており、このことから元は海老すくいは御座敷で行われていたという表現が入っていたが現在の高原田ではその部分が欠落してしまったのだと考えられる。aで「さくい長者」となっている部分はb、イ、ロとも同じ「さいく長者」であることからこれは「さいく長者」が元々の言葉だと考えられる。

下野・高原田両地域で演じられている海老すくいは台詞の順序、使用されている言葉の類似点から現行のb高原田の台詞はイ：高原田明治本を、a下野はロ：新潟県民俗芸能誌を元に行っていることがわかる。

【注釈】

- ・鎌倉海老…主に伊勢海老のことを指す。
- ・しわい…吝い。ケチの意味。
- ・ざんざらめ(く)…ざんざめく。さざめくの撥音化したものでざわざわする、の意味。
- ・ぬかえび…ヌマエビ科の小形のエビ

(廣野 彩子)

第4項 龍砂川

龍砂川は、安倍晴明が朝廷の命を受け天竺へと赴く話を軸にして、守るべき十戒を表した物。高原田・下野両集落に戦後まで伝承されたが、現在行えるのは下野のみ。

1. 詞章

龍砂川(『新潟県民俗芸能誌』)

登場人物：安倍晴明 北の方 耆婆 要子 巫

晴明 是れは、内裏の官人、安倍ノ晴明で御座ります。この度、内裏様より、大唐天竺へ、使者に上れとの御諭言で御座ります。これにつき、北の方呼び出し、暇乞致さうかと存ずる。

北の方 ほう、何か御用で御座ります。

晴明 今度内裏様より、大唐天竺へ使者に上れとの御諭言であるわい。

北の方 それはまた如何と云ふやうな使者で御座ります。

晴明 さればその事、釈迦釈尊の未来経、老子、孔子、仁義礼智信、五つの五常、提婆王の六十一時の考え、耆婆の妙薬、ていか迦陵の詩歌管絃、こうかんによ教、きよがいでまで、皆な、詠覧してこひとの御諭言であるわい。

北の方 ほう、それはまた、二十日ばかりでお帰りなさる事で御座りますか。

晴明 あア、二十日や三十日。五年や十年。二十年過ぎても帰らぬものならば、道の露霜、消えたと心得て、御身の後を問ふてさすべし。

北の方 ほウ、二十年三十年がその間、自らが、我身は何といたませう。

晴明 あア、衣服諸服、髪油、諸道具、金銀は、皆な、内裏様より下さる事であるわい。

名残惜しくは候へども、これまでだとや。

北の方 ほウ、暫しとどませられ。

晴明 あア、こりやこりや、ここをば離しやれ、ここに一つの譬へあり。

北の方 ほウ、それは何んと御座ります。

晴明 それ天竺、悉達太子と申せしは、耶輸陀羅女の情の袂をふりちぎり、阿羅邏加羅摩の仙人を頼み、遂には、沙門にならせられたと申す。斯様な例もあるわい。名残惜しくは候へども、これまでだとや。

北の方 ほウ、なま木の枝をさくとは、この事じやわいのう。

晴明 あア、さらば、さらば。

(ト、三、四歩退る、女静かに入る。)

いやいや、天竺さして急ぎませう。

(ト、逆に舞台を二度まわり廻る。)

これはしたり。急ぐに程なく天竺に着きました。

耆婆様はお宿に候か。耆婆様。

(ト、垂櫻の冠、狩衣、袴の耆婆が出て、上手に晴明は下に、兩人、正面向にならぶ。)

耆婆 耆婆と御尋ねなされ候は、如何なる人の御来入にて候。

晴明 苦しうもない、葦原国の安倍ノ晴明で御座ります。

耆婆 葦原国の安倍ノ晴明殿には、まつた、何んとして、この所へ御来臨遊ばされました。

晴明 さればその事、今度、内裏様より、釈迦釈尊の未来経、老子、孔子、仁義礼智信、五つの五常、だいばん王の六十一の時の考へ、耆婆の妙薬、ていかりようの詩歌管絃、かうかんによつて教、きよがいだてまで、皆な詠覽してこひとの御論言で御座ります。あなた御指南なされて下され。

耆婆 指南は致しますとも、心易い儀に御座ります。

晴明 その儀にも御座りませうものならば、今日より子弟の契約をなされて下され。

耆婆 如何に晴明殿、今日より子弟の契約の祝として、この扇を進ぜます。この扇には、梅に鶯をかき置きました。開けば春の陽気として羽をのし、音をいだす。たためば、元の古木につく。随分大切になされ。

晴明 ほウ、御有難うござります。

耆婆 如何に晴明どの、御身帰国のその時に、数万里の海上をしのぎ、四百余州の唐を通り、夜道、川越、かたあらいそひ七この妻に心ゆるしやるなや。

晴明 ほウ、御有難うござります。

耆婆 さるによつて、ここもとに千把の芽を積みおく。御身、身上に何事かあらんその時に、此の芽たちまち炎になり焼失致す。その時、葦原国に下り、御身のあとを問ふてさすべし。

清明 ほッ、その儀に御座りませうものなれば、積み置きませう。

(ト、笛、小太鼓の囃子になり、折々扇を合わせつつ、兩人逆に舞いまわる。「ハアイザハハ」とはやす。)

清明 目出度芽も積み収めました。名残惜しくは候へども、お暇乞仕りませう。

耆婆 なかなか。

兩人 さらばさらば。

清明 いやいや、葦原国さして急ぎませう。

(ト、兩人は、舞台を回って入る。)

頭巾、羽織、たつつけの要子出る。一廻りして、中央にてきまる。)

要子 これは、内裏の要子と申す絵かきで御座ります。絵かきも絵かきも大名人の骨頂で御座ります。承れば、安倍ノ清明は、大唐天竺へ使者に上られたとな。かれが女房は、日本にも並びもない美女だと申す。かれは処へ押後家入りを致さうかとも存する。なれども異なるものじやわい。いやいや、そろそろ急ぎませう。

(ト、急ぐ振をして舞台を一廻する。)

これはしたり、急ぐに程なく、清明の館に着きました。清明の北ノ方、戸を開けやれ、清明の北の方。

北の方 ほッ、この処は無亭のところで御座ります。

要子 無亭の処知つて参つた。戸を開けやれ。

北の方 戸を開ける事はなりません。

要子 さてさて、用あつて来たものに、戸を開けやれ。

北の方 用あるなら、門よりそとにて仰せられ。

要子 ここにて語る。御身それにて確かに聞きやれ。かう申すは、内裏の要子と申す絵かきなれば、まつた、大唐の事は申すに及ばず、それ内裏の紫宸殿、清涼殿、拝領殿、物見殿、音楽殿までの絵の様子は、皆かくによつて、まつた、こうりや、内裏様より、要子と申す、じじようを下されてある。それ大唐に上るには、数万里の海上をしのぎ、四百余州の唐を通り、唐の天竺の州堺に、竜沙河とて大川あり。

(ト、大きく振あり。)

まつた、此の川に竜の居る事、只々浮塵子の如し。

(ト、振がある。)

此の川を渡らんとすれば、われとつて服さん、人とつて服さん、只々きりくだ流すが如し、清明今頃、竜の餌食になつたであらう。御身あいなしだのみの人ではないか。

北の方 ほッ、それは実で御座りますか。

要子 あァ、実も実も実で御座る。

北の方 それなら、わが君様は、大唐天竺へ使者に上られました。わが国へ、目出度う、

御帰朝のため、願りやう納めに参りませう。

要子 おら（私という事）もついて参りませう。

北の方 つがせられますな。

要子 女に男はつくべきもの、おらは見物に行くわい。

（ト、無言に大きくトまわりする。要子もついて廻る。要子は下手に立つ。）

北の方 急ぐ程に、かんなぎ（ここでは巫の文字をあて、「をかんなぎ」か「めかんなぎ」が不明。）様につきました。巫様、巫様。

（ト、下野部落では、烏帽子、白狩衣、白袴の蛭が登場、兩人の間を抜け上手に立つ。）

巫 巫と御尋ねなされ候は、如何なる人の御入に候。

北の方 苦しいもない。公卿の内房で御座ります。

巫 公卿の連中方には、この処へ、何んとしての御出でで御座ります。

北の方 さればその事、わが君様は、大唐天竺へ使者に上られました。わが国に目出度う御帰りのため、願りやう納めに参りました。願りやう納めて下され。

巫 願りやうは、納めますとも、社への役目で御座ります。その儀にも御座りませうものならば、護摩の壇に登り、祝詞と捧げ、壇の板を踏みませう。

北の方 ほう。

（ト、巫は進み出、女と下手に坐る。要子奥に座す。巫は坐したまま、左手に幣をとり、右手に鈴をとって、謡と小太鼓とに合せて、鈴を振る。）

巫 そもそも祓ひ清め奉る。それ上には、梵天帝、釈四天王、五道の冥官、それ下界の池には、天神七代、天の岩戸押開いて、地神五代、伊弉諾、伊弉冉の命より五代の末をば、鷓鴣草茅不合尊まで、人皇たりと申せども、日本は神国なりや、臣々たりや、君たりや、君、君たりや臣たりや、神は、あがらせたまへと申せども、高天原には神たえず、昼夜六社神遊び、さるによつて、願りやう捧げ奉る。

（ト、鈴を振りとめ、持物を上下に振る。）

絶えずとうたりや 神の前に千早ふる

（ト、笛と小太鼓になり、巫は立って舞う。扇は襟にする。後ふりかえりつつ、鈴を振っては順にまわる。角々に跳るような振がある。袖もかえす。幾度かめぐる。対角に進むこともある。これには、古風な巫女舞の型が反映されている。）

囃 幣束踊

巫 かけものをなされ。

（ト、巫は上手にすまう。）

（女は進み出、懐中より小さい数珠をとり出し、歌に合せて繰る。舞って出て、逆まわりに持物をくるくるとふりつつ角々に振あり、なお二まわりする。）

北の方 それ女の欲しきものには、七つ七やうの懸物よ、それ黄金の笄、尺長帯に尺長のかもじ、十二の手箱に、唐の鏡が七面、白味の鏡が七面、綾の小袖に、錦の小袖七重、神のりんずと聞くからは、竜沙河には天の浮橋とやらんをかけて、神の通はせ給ふ

橋とかや、竜沙河には天の浮橋とやらをかけて渡らせ給へよ、わが君様よ、わが君様。わ国へ目出度御帰朝ましまさば、見目よき稚児は十人すぐり、天冠、瓔珞にてこしらひたて、羯鼓に手拍子、簫に箏、琵琶に琴、太鼓に笛、鼓に鈴、八しよう道具を打鳴らし、七日七夜の稚児の舞、それ天より天人舞ひさがる。地より竜神舞上る。数万の人の見物は、久遠浄土のだらし菩薩の音楽よ、これにはいかでまさるらん。よつて懸物件の如し。

(ト、謡いとめて立膝になる。三人正面向きに並ぶ。巫は一番上手である。)

巫 ご苦労なされました。わ国は目出度御帰朝で御座りませう。身は居宅へ帰る。

(ト、入る。)

北の方 有難う御座ります。おらも帰りませう。

(ト、一と廻りする。)

要子 おらも、ついて帰りませう。

(ト、女は上手に、男は下手にならぶ。)

北の方 又ものうもつかさせられますな。

要子 ふうん、この女は、けんどな女じやな。御身、夫の晴明は畜生じや。

北の方 なに、畜生じやむし。

要子 なかなか。

北の方 仔細。

要子 仔細聞きたくば、語つて聞かせう。晴明の親は、安倍の又重とてな、日本に並びのない色好みの奴で、かれが女房になり手がなかつたとあるわい。音に聞け、信田が森の狐めが女と変化、又重と語いをなし、晴明一人生み捨てて、一首の歌をよんで、ここを逃げ去つたとあるわい。

北の方 ほう、それは、何んとよみました。

要子 先づ聞かせられ(ト、扇を前にし)「恋しくば、尋ね来てみよ、和泉なる、信田が森の、うらみ葛の葉」と書いて、ここを逃げ去つたとあるわい。あの様な畜生と語いなす此の世では、けがれとなる。死て後いちはやく、ほつこうが間、畜生道へ墮だいするとあるわい。御身ただただ、それがしに従ひやれ。

北の方 従ひませう。

(ト、要子の方を向いていう。)

要子 従ふや、ハアハ、きさく人きさく人。

北の方 さらば帰りませう。

(ト、まわる。)

要子 なかなか。

(ト、大まわりして、兩人座す。)

北の方 酒を酌みませう。三杯まいれ三杯まいれ。

晴明登場、上手に立つ。

晴明 嬢、今帰つたわい。

北の方 ほっ、お早うお帰りなされました。

(ト、女は立つ。)

晴明 これは言語に断へたる風情じやな。

(ト、座す。)

北の方 ほっ、これのおの子が、お気にさわりますか。

晴明 おう、なかなか。

北の方 これは、内裏様より養子の児で御座ります。

要子 これは、内裏様より養子の児で御座ります。

晴明 言語に断へたる風情なれど、旅疲れだ、暫く休む。

(ト、横になる。)

北の方 ほっ、飯の出来る迄で、やすますられ。

晴明 なかなか。

北の方 この扇には、梅に鶯を書き置かれました。開けば、春の陽気として、羽をのし音を出す。たためば元の古木に付く、書きかへる様は御座りませんか。

要子 梅に鶯や某が得手のもの、どうりや、どうりや、さらさらのさらは、こうりや。

北の方 飯が出来ました。起させられ。

(ト、皆座す。)

晴明 何と、飯が出来てあるかな。

北の方 ほっ。

要子 大唐には、かはりました儀はござりませんか。

晴明 大唐と申して、仁儀などに変りは御座りませんが、絵などかくに、大きな違ひが御座ります。

要子 それはまた。いかようなる絵をかくことで御座ります。

晴明 先づはや、大唐の者のかきましたる絵は、鳥類かいて中を立つ。畜類かいて地を走る。なんぞ、そなたが絵をかくなぞと申しても、絵をかくでも、紙をよごすでも御座りますまい。

要子 それは偽りで御座りましょう。なんぞ大唐の者のかきましたる絵じゃとても、鳥類かいて中を立つ、畜類かいて地を走るためし御座りません。偽りで御座りませう。

晴明 偽りでは御座りません。某、腰の扇には、梅に鶯かきおかれました。開けば春の陽気として、羽のし音を出す。たためば元の古木に付く、偽りでは御座りません。

要子 それは偽りで御座りませう。それなら、かけずく(賭け尽)をなされ。

晴明 それよからう。

要子 かけずくも、かたつ頸かけずくで御座る。がてんで御座るか。もしその鳥が立ちましたる時は、拙者の頸をその方に渡す。もし、たちませんときは、その方の頸を拙者がとる。がてんで御座るか。

晴明 おう、なかなか。

要子 さらば御出しなされ。

晴明 こうりやこうりや。

要子 ほうほう、どうりや、立ちましたかな。

晴明 嗚呼、立ちません立ちません。これこそは天竺の耆婆様の仰せられました夜道、川越、かたあらしひ、七子の妻にも、心許すなどは、これの事、何と致しませう。裏の竹藪にまいり、切腹いたしませう。

(ト、立って入る。)

要子 それよかろう。心に掛る者は打つて捨て、比翼連理の契りとは此の事じやわいのう。
北の方 ほう。

(耆婆以前の冠姿で登場、中央にてまわる。)

耆婆 嗚呼、さてもさても、何と致しましたか、晴明が積みおいたる芽、焼失いたす。これに付、葦原国をさして急ぎませう。

(ト、静かに一まわりし、上手に立つ。)

こわしたり、急ぐ程なく葦原国に着きました。晴明のやかた、これあらんか、晴明。

要子 (座したまま) 晴明のやかたでは御座りません。要子のやかたで御座ります。

耆婆 晴明が居るから晴明のやかたであるわい。

要子 要子が居るから要子のやかたで御座ります。

耆婆 いにしへ、晴明がをるから晴明のやかたであるわい。

要子 晴明は居りません。それなら、かけずくをなされ。

耆婆 それよからう。

要子 かけずく賭けずく、かたい頸かけずくである。がてんで御座るか。もし晴明が居りましたる其の時は、拙者の頸を其の方へ渡す。若し晴明が居りませんその時、その方の頸を拙者が取るが、がてんで御座るか。

耆婆 おウ、なかなか。

要子 さらば、おだしなされ。

耆婆 晴明でやれ、晴明。

(ト、晴明が長烏帽子、白狩衣姿で、中に出て座していう。)

晴明 ほう、これこそは天竺の耆婆様で御座りました。数万里の海上を凌ぎ、四百余州の唐を通り、遠方御苦労、御来臨遊ばされました。

耆婆 晴明、なつかしいな。

晴明 ほう。

(要子は後ろで不信の面持、扇を開いて見る。)

耆婆 やい汝、切腹か、この方、手打ちにするか。

要子 ここもとは御許るされ。何んと致しませう。裏の竹藪へ参り、切腹いたしませう。

耆婆 それよからう。

要子 昔は、わら田のふちをまはる。今はぜにのふちをまわる。なんだ早う、まはりつきたいな。梅に鶯も何にもいらんぞやァれ。

(ト、千鳥足に、舞台をまわり、扇を投げ捨てて入る。)

耆婆 やい、言語に断へたる風情なれど、女子の儀なれば許す。これにて十の遺言す。御身それにて慥かに受けきやれ。

北の方 ほう。

(ト、中の扇を合せつつ輪に舞う。)

耆婆 いーツ、ひとやうに、人の噂をいやるや。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 二ツ、二やうにふた心起すな。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 三ツ、美事に見られるやうに。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 四ツ、世の中、良いやうに渡れ。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 五ツ、いつ迄も、我が心に、よだんばしかけるな。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 六ツ、むとうに、無理な事おしやるな。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 七ツ、なじうな者にも、なさをかけやれ。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 八ツ、やたらに、野心を起すな。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 九ツ、根生すなほにもちやれ。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 十に、とかく人をば、あたけびやうしにころすな。

北の方 それもさうとも受けませう。

耆婆 この事を受けませうといふならば、三笠山に腰かけるの思ひ。耆婆は天竺へ帰りにける。

(ト、女は入り、なお兩人一トまわりして退場。)

流砂川(『柏崎市史資料集民俗篇』・高原田本)

せいめい「これわだいの官人。阿部之姓名でござります、たいり様よりローシ、コウシ、リングレイチシン、五つの五条、カラカンニヨウキヨ、いたて、しやかしくその、みらいきよ、だいはん王わ、六十一の時の考い、ぎばの妙やく、しかかげん、てかりようまで みな いいらんしてこいとこの御りん言でござります、それにつき、北の方を、よびい出し、いとまごいつかまつらうかとぞんづる、北の方出やれ、北の方。

妻「ほ一なにが御用で御座ります、

せいめい「だいら様よりロウシ、コウシ、リングレイチシン、五つの五条、からかんによきよをいたて、しやかしくその、みらいきよ、だいはん王は六十一の時の考い、きば

の、みよやく、しいかかげん、てかりようまでみないいらん、してこいと、ごりんげんで、あるわい、

妻「ほーそれは廿日ばかりでおかいりなざる物で御ざりますか、

せいめい「二十日や三十日、五年や拾年廿年すぎて、かいらん、物ならば、井水のすいとらんちぎりをこめ、みらいつよしい、物を聞いたと、あとをとうてさすべし

妻「みづからかねはなんと致しましよ、

せいめい「ほーいふくいしよ、かねあぶら、みなだいら様よりみなくださるはづの事

妻「しばしとどませられ

せいめい「ココはなしやれ、ここに一箇の、たといあり、それ天じく、しつたたいしは、やしよたら御前の、なさけのたもとふりちぎり、あらだ千人、からだ千人の人だのみ、ついにしやもんとならせ、たもうたと、かような、れいもあるはい、

妻「ほーなま木の枝をさくとはこのことで、御ざります、をなごりほしよござります、

せいめい「さらばさらば、いやいや天じくをさしていそぎましよう、よそぐにほどなく天じくいつきました、ぎば様に案内こいましよ、ぎば様は御宿に候か、ぎば様

ぎば「ほー ぎばとをたづねなされ候はいかなる人の御らいによにて候

せいめい「ほーこれは、あしわら国の阿部之せいめいのでござります。

ギバ「ほーせいまい殿にわ数万里の海しようをしのき四百四州の唐を通り、なんとして、これい、とてんしたまう

さらばそのこと、だいら様よりロウシ、コウシ、リンギレイチシン、五つの五条からかんによきよをいたて、しやか、しやくそのみらいきよう だいはん王わ六拾一の時の考い、ぎばのみよやく しいかかげん、て、かりよう、までみないいらしてこいと、ごりんげんで、あります、これをごしなん、なされて下され、

ギバ「ほーごしなん致しますとも

せいめい「シテイノケイヤクラシテ下され

ギバ「シテイノケイヤクノいはいとして、このあうぎを一本しんぜます、

せいめい「ほーおありがとう御ざります、

きば「ほーこの、をうぎには、梅にうぐひす、書き居き、まして、ひらけば春のようきと、なつて、四節に、ねをい出し、たためば、もとの古木いかいります、ずいぶん大切になされ、

せいめい「ほー御有難う御座います

ギバ「御身帰国の其の後身の上に、何事かあらん其の為千ばの、かやを、つみましよう、かやも、目出度積みました、御身き国の其の後、何年かあらん其の時、ここに千ばのかやをつみをき、たちまち、ほのうとなつて、焼失致す、其の時あし原国へ降り、御身のあとを、とうて、さすべし、おんみ帰国そののち、よみち、川ごい、かたあらそい、七この妻に心よろすな、それ一のだいじてござる、なごりおしわ候へ共これまででござるヨウス「これはだいら様より、ようしにまいりた、様子と申ス、いかきでござります、うけたまわれれば、阿部のせいめいは、天じくい、ちよくしに昇られたと、言う事で御ざり

ます。かれが、によ一ほは日本にもならびもないびによでござります、かれいまいり
をしもこいを致さうかと存ずるなれどもひよんな物でござります。いやいやせいめい
が、やかたを、さして、いそぎましよう、来り、せいめいがやかたへツキました、北の
方戸あけやれ、

妻「ほ一この所は無抵で御座ります、

ヨウス「ほ一無抵のとこ、しつてまいつた戸をあけやれ、

妻「ヨウあつてござられましたら、門ヨリ外デ、ヨウテかいらせられ、

ヨウス「ほ一ここにてゆ一御身そこにてたしかにききやれ これはだいら様よりようじ
にまいつた、ようじと申す、ゑかきであるはい、それより代理様よりようすと申すりり
よを下さつておるはい、それゑをかくならば、たいとう天じくは申すに、をよばず、お
だいらの、ししい殿、すいりようでん、拜りよう殿、物見殿、おんがく殿、迄もずつ
と、ゑをかく、ゑかきでござる、受けたまはれば御身妻のせいめいは天じくい、しよく
しに、昇られたとの、其れ天じくい昇るには す万里の海じようをしのぎ、四百餘洲の
唐を通り、唐と天じくとの、しよざかい、流砂川とて、大きなだいい川あり、其の川に、
龍のいたことはただただうんかの如し、其の川を、こさんとすれば我とつて、ほごうさ
ん、人とつて、ほごうさん、と、ただただきりくだを、流すが如し、セイメイハイマシ
ゴロハリヨノイヂキニナラレタデゴザリマシヨウ、御身あいなしたのみの人であるは
い、

妻「ほ一我君様は天じくい、勅使しに昇られました、は国い、御帰朝の為めに、ぐはん、
ぎよう、をさめに、まいりましよう、

ヨウス「をらもついてまいりましよう

妻「つかせられんな

ヨウス「ふん、見物に行くはい、

妻「かんなぎ様いつきました、かんなぎ様は御宿に候か、かんなぎ様

カン「ほ一かんなぎと御たづねなされ候は、いかなる人の御らいによにて候、

妻「ほ一くげの内法でございます

カン「ほ一くげの連中かたには、なんとしてこの所へごらいによにて候、

妻「ほ一我君様は、天じくい ちよくしに昇られました、わ国い御き朝の為に、ぐわんぎ
よう、をさめにまいりました、ぐはんぎようを、をさめて下され、

カンナギ「ほうぐはんぎようも、をさめますとも、ごまの段いあかり、御へゑを、ささ
げ、のつとを上げましよう。

妻「ほ一有難うござります、(コレハダイカンナギノ、ノリト)

抑々のつとをささげ奉つる、国とこたちの命より、いざなぎ、いざなぎの命、より、を
がやふきはせすの命、天神七代、地神五代の、すいをん葉、あまの岩戸をし、ひら
き にんのうたりといいどもや、たかまが原のかみ遊び、中夜六しやに、たいひざるに
よつて、身々たりや 君たりや、君にいたりや、死にたりや、さて三十さいはいの、の
つとを、うやまつて奉る、(ごんひよしのまい)、めでとうぐはんぎようもをさめまし

た。

妻「ほ一有難うござります

カン「ほ一さらばかけ物をなされませ、それがしは、糸宅いかゑる、

妻のかけもの

抑々女のほしき物には、七つ七様のかけ橋、十二に手箱に、唐の鏡が七面、白みのかがかみか七面で、黄金のかうがゑ、尺長をびに尺長かもち、あやの小袖か錦の小袖か七かさネ、神もりんずと聞くからは、天ちくのりよさ川には天のうき橋、とかや、やらずが神もわたらせたまはん橋とかや、我君様をわたらせたま、我君様をわ国八目出とう御き朝ましまさば、めめよきち子、十人すぐり、かつ子に手びようし、ひよ しちりきよ、びはに、コト、たいこに、フエ、ツヅミにスズ、はつしよどう、打ならし、七日七夜の、ちごの舞、天より天人舞下る地より、どうぢが舞上る、数万の人の見物に、天しよくの、ざらりほさつの音がくに、これでは、いかでか勝らん、さてぐわんぎようを、おやまつて、奉る、ぐわんぎようも目出とう、をさめました。さらば、い宅いかゑりましよう。

ヨウス「をらもついで帰らましよう。

妻「つかせられんな、

ヨウス「フンけんどうな女だ、女に男はつきもんだ、御身妻のせいめるは、ちくしようだ

妻「しさいは

ヨウス「しさい知らずは、かたつてきかしよう、せいめいは、あべの又しげが子で、な、あげの又しげとようは、あべの又しげとは日本にも、竝もなき、色ぐるみのやつで、あつたと言フはい、かれが、にようぼうになりてがなうて、しのだが森の狐め、女とヘンげ、又しげとかたらいをなし、せいめい一人うみをいて、一書の歌をよみ こいしくばたづねきて見る いづみ也 シのだかもりかくづのはと ここを逃げたと言フはい、其の様なちくしようと、かたらいをなし、此の世では、けがれとなる、死したる其の後一役をつこうが其の間ちくシヨどへ、バタありとだだするとはい

妻「実でゴザりますか

ヨウス「ほ一実も誠実であるはい

妻「それならしたがいましよう

ヨウス「したがをうや、きさき人をきさき人を

妻「みかどこいあいばせられ、

ヨウス「みかどこいあいべや、お、さいこうさいこう

妻「みがとこいつきました、

ヨウス「をらもつきました、

妻「酒をくりヨウ

ヨウス「ゾウソウデゴザル、さんばいまいれさんばいまいれさんばいまいれ

セイメイ「を一北の方 今かいったわい、

妻「ほ一おかいいなさいました、

セイメイ「ほ一長の道中つかれたやすむ、妻「はんのできるまで休ませられ
 妻「なにか天竺にはつた事わござりません
 セイメイ「ほ一なんにも天じくには、かはつた事はないが、天じくの物のあうぎに書いた画
 が、ひらけば四節にねを出す、たためばもとの古木いかへる、
 ヨウス「なんと天ぢくにわかはつた義はないと言うかい
 妻「ほ一なんにも天ぢくにはかはつた義はない、天じくの物のあふぎには書いた画が、四
 節にねを出す
 ヨウス「ほ一それを少と見たい物だ、
 妻「ほ一
 ヨウス「ほ一これコソ梅にうぐひす、それがしが、よてのもの　さらさらのさら　さらの
 さら　そをうら、をこしやれ、
 ヨウス「長々御苦労で御座ります、
 セイメイ「をみや又なんだい、
 ヨウス「ほ一代り様より、ヨウシに、まいつた、ようすと、申す画書でござります、なん
 と天ぢくにはかはつた義はござりませんか、
 セイメイ「ほ一なんも天ぢくにはかはつた義はないが、天ぢくの物のあふぎには、ひらけ
 は春のようきとなつて四節にねを出す、たためば、もとの古木いかいる、そなさん方が
 画を書でも紙よこすでもあるまる、
 ヨウス「フン天ぢくノ物のあふぎに書いた画だとても、ねを出しますまい、
 セイメイ「い出します
 ヨウマ「さらばかけぞくをなされましよう
 セイメイ　かけぞくもかけぞくも、かたい首かけぞくでござるが、合てんで御ざるか
 ヨウス「を一なかなか　さらばお出しなさい、ホウホウソウラ立ちましたかい
 セイメイ「立ちません立ちません　コレコソギバ様ノオオセナリ　なんと致しましろう
 に、切づく致します。
 ギバ「せいめいは、ムとうな、シによう、してある、ここもとに、つみをいたる、かや、
 たちまち、ほのうとなつて、焼失つ致し、これにつき、あし原、国へ降り、せいめいが
 あとをとうて、さすべし、いやいや、あし原国を、さして、よそぎましよう、よそぐに
 ほどなくセイメイガヤカタイつきました、せいめいは、内に、いられたかや、せいめ
 る、
 ヨウス「せいめゐるがやかたでござりません
 ギバ「せいめゐるがやかた、知てまゐつた、わい、
 ヨウス「は一ヨウスが、いたから、ようすがやかたでござります
 ギバ「せいめいがいたから、せいめいがやかたでござります
 ヨウス「カケゾクに致しましろう
 ギバ「カケゾクにシヨハイ
 ヨウス「カケゾクもかけゾクモ、かたい首かけぞくでござりますぞ、がてんでござるか、

ギバ「おーなかなか

ヨウス「サラバお出なさい、

ギバ「せいめゐ出やれ、せいめゐ、

セイメイ「ホー天ちくのぎば様に、をはしますか、数万里のかいしようをシノギ、四百餘州唐を通り遠方をご苦労様でございました、

ギバ「ヤイ汝、この方手打か、そこもと、せつぶくか

ヨウス「なんと致しましう、せつぶくを致します、昔は、わら田の、ふちをまはる、今は銭のふちをまわる、なんだ、はようまわりつくだいな、梅に、うぐひすも、なんにも、いらんぞや

ギバ「やい なんぢ、ごんごにたいたる、ふぜいな、なれども、りよ子の事なれば、よるす、ここにとうの、いい言あり、御身そこにてたしかに、うけやれ（とうのいゐ言）一ツ人を、あたけびよしに、ころすな、それもそうともうけましよう、二ツ二人が二心、をこすな、それもそうとも、うけましよう、三ツみごとに見られるように、四うツ、世の中よいように渡れ、五ツいつまでも、我れが心に、よだんばシかけんな、六ツ むしようにむりな事よやんな、七ツなじょうなもんにも、なさけをかけやれ 八ツやたらに、や心を、をこすな、九ツ こんじよう、すなおに、もちやれ、十に十の事を、うけましよう、と、いはば 三笠山に、こしかける、をもち、我は天じくいかいるにける、エー

2. 詞章比較

全体を通してみると、大きな変化はない。『柏崎市史』収録の詞章の方が、聞き書きの印象が強く、それによる字句の差異・脱落は見られる。以下、A『新潟県民俗芸能誌』と比較したB『柏崎市史』について述べる。

最初にまず、晴明のセリフでは、B「ロウシ、コウシ～」の部分が重複している。A「道の露霜～」以下の部分が、B「井水のすいとうらんちぎりをこめ、みらいつよし、」にあたると思われるが、音だけに於いても共通性を見出しにくい。続くB「物をきいたと、～」は、A「消えたと心得て、」と大体一致する。次の妻の言葉では、A「二十年、三十年がその間」がBでは抜けている。晴明のA「名残～」も続く二ヶ所において同様に欠落。代わりに、妻の別れの言葉の中にB「をなごりほしよござります」が入っている。

耆婆との会話では、最初の晴明の名のりの中にA「苦しうもない」が抜けている。またそれに答える耆婆の言葉にB「数万理の～」が加わる。また、扇をもらった際の謝辞が耆婆のセリフの中間に入っている。扇の説明ではBには「四節に」とあるが、Aにそれと聞き間違えたと思われる。以下の部分では、全体的に語句の移動や語順の変化が見られる。また、兩人によるA「さらば」の語句がない。

要子登場の場面での目立つ差異は、Bでは要子が「ようし（養子？）にまいりた」と言っているところである。Aではそれにあたる部分はこの段階ではない。また、A「異なるもの」をB「ひよんな物」と読んでいる。また、B「それより代理様よりようすと申すり

りよを～」に当たる部分がAでは後にくる。他にB「受けたまはれば～昇られたとの」もAにはない。A「服さん」→B「ほごうさん」。また、この要子のセリフのあとの北の方と要子のセリフが一つずつBでは抜ける。次に、要子のA「女に男はつくべきもの」がない。

巫登場の場面では、巫のセリフに差異が見られる。A「社への役目～ものならば」とA「壇の板をふみませう」が抜け、B「御へみをささげ」が入る。次の祝詞では、大体の語句は共通しているが、総じてBで抜けている物が多い。祝詞の後の囃・装束踊も、Bには記載がない。続く北の方の懸物の差異は以下のとおり。まずA「七つ七よりの懸物よ」B「七つ七様のかけ橋」、A「天冠、瓔珞にてこしらひたて」B「脱落」、A「地より竜神」B「地より、どうち」、A「久遠浄土の」B「天しよくの」、A「よって懸物件の如し」B「さてぐわんぎようを、～かありましよう」となる。最後が大きく異なっている上、巫のセリフが抜けている。

再びの北の方と要子の会話では、先ほど抜けた要子のセリフがB「女に男はつきもんだ」と入る。次の二人のセリフも一つずつ抜ける。最後のA「御身～従ひやれ」が抜ける。この後、BにはAにないB「みかどこいあいばせられ～をらもつきました」の一連の会話が入る。

晴明が帰った後の場面では、前後とのセリフの入れ替わりが見られる。A「言語に～養子の兎で御座ります。」がBには見られない。養子に当たる表現は、前半部分へ移動している。また、Bではこの後、北の方が晴明に天竺の様子を尋ねるが、Aではそれは要子が聞いている。扇に関しては、Aでは北の方が書き換えを持ちかけているのに対して、Bでは要子が自ら書き換えているところに違いがある。その後の晴明と要子の会話も細部は異なるが、大体同様である。首かけぞくの部分では、要子による賭けの条件提示がBでは抜け、すぐに賭けの実行となる。晴明のA「裏の竹藪にまいり」が抜け、続く要子と北の方のセリフもそっくり脱落する。

耆婆の再登場の場面でも、要子による賭けの条件提示は抜けている。晴明再登場後の耆婆との挨拶A「晴明、なつかしいな」も抜ける。要子のA「裏の竹藪へ参り」のセリフも脱落。最後の耆婆の十戒では、Aでの十がBでは一となり、十が抜ける。

3. 考察

最初の印象通り、B『柏崎市史』はA『新潟県民俗芸能誌』の内容で上演されたものを聞いて書き記したと考えて良いと思われた。細かな語句の差異は、発声を耳で聞いた時に起こる間違いと判断し得るものが多く、後半部の欠損の多さはあるいは筆記者の集中力の欠如によるものではないかとも思われる。当時は録音機器がそれほど普及していなかった可能性も考えられ、記録の機会が少なかった為に補われること無く語句が脱落したまま残されたのではないかと。しかし、BにありAに見られない語句や文、聞き間違いとは考え難い程に詞句が移動している例も見られる。これらに関しては、Bを記録した段階で上演されたと考えられるものが、既にAを聞き書き等で変容させた物であった場合と、上演者によるアドリブの混入ではないか。構成やセリフが細かく規定されている現代の演劇や踊り

等と異なり、記録方法が多くない時代に於いては、所作・詞等は上演者の記憶によっており、またその時その時で変化させたことも考えられる。

4. 註釈

- ・迦陵…極楽浄土にいるといい、顔は美女のようで、その声が非常に美しいことから仏の
声の形容とされる鳥。
- ・阿羅邏…八寒地獄の一つ
- ・浮塵子…カメムシ目ウンガ科および近縁諸科に属する昆虫の総称。稲の汁液を吸い枯ら
せる害虫。時に大発生することがある。
- ・懸物…勝負事や遊戯などで、勝者やすぐれた者に与える金品。
- ・かもじ…女性が自分の髪（地毛）で日本髪を結うときに、髪型を整えるために、中に入
れこんだり、添えたりするもの
- ・瓔珞（ようらく）…インドの貴族男女が珠玉や貴金属を編んで頭、頸、胸にかけた装身
具。
- ・羯鼓（かっこ）…雅楽に使われていた楽器
- ・比翼連理の契り…男女の仲がむつまじいことのたとえ。

（大島ひとみ）

参考文献

前号に同じ。

おわりに

新潟大学Gコード科目「地域を探る―越後の芸能―」において、綾子舞について何度か話す機会があった。綾子舞の歴史について、歌舞伎踊り初期の芸態を示す貴重な芸能として紹介し、ビデオを観て講義をすすめた。学生諸君の中には、綾子舞のあざやかな衣裳や、扇を使つての華麗な舞の振り、芸能史上の意義、一地域で伝承されてきたことに、驚きをもって聴講してくれた人も多かったように思う。毎年2～3人は冬期の寒い中、現地に行つて、綾子舞会館で調査し、館長さんのお話をうかがつて勉強してきたようである。若い人に伝統を理解してもらうことは、なによりも心強いことである。

平成12年度から何度かにわたつて現地で調査させていただき、柏崎市女谷の多くの方々には、たいへんお世話になった。あつくお礼を申し上げたい。

前号と合せて、まったく拙い調査の成果であり、誤謬や思い違いなど数多いことと思うが、わずかでも参考になればさいわいである。

（萩 美津夫）